

公定価格・利用者負担の 主な論点について

平成26年1月24日

目 次

○ 子ども・子育て新制度における公定価格の概要	2		
○ 公定価格に関する論点について			
1. 公定価格の基本的な構造	3		
2. 公定価格の個別検討項目について	11		
Ⅰ. 共通要素①に関する検討の視点			
1-1. 認定区分との関係	12		
1-2. 年齢との関係	14		
2. 保育必要量との関係	15		
3. 地域区分との関係	16		
4. 定員規模との関係	22		
Ⅱ. 共通要素②に関する検討の視点			
1. 人件費に係る事項について			
① 職員配置について	30		
② 処遇改善、経験年数等に応じた公定価格上の 評価、キャリアアップについて	33		
2. 人件費、事業費（教育・保育の提供）に係る事 項について			
① 保育必要量の取り扱いについて	37		
② 年間を通じた学校教育・保育の提供について	38		
③ 給食費の取り扱いについて	38		
④ 障害児の受け入れ促進について	39		
⑤ その他	43		
		3. 管理費に係る事項について	
		① 減価償却費、賃借料の取り扱いについて	43
		② 第三者評価の費用の取り扱いについて	43
		Ⅲ. 各種加算に関する検討の視点	44
		Ⅳ. その他の論点について	
		1. 保育所、幼稚園、認定こども園に係る事項について	
		① 施設ごとに求められる職員の配置との関係に ついて	46
		② 子育て支援機能について	46
		③ 事務処理体制について	47
		2. 地域型保育事業に係る事項について	48
		○ 利用者負担に関する論点について	
		1. 新制度における利用者負担の構造	56
		2. 利用者負担の検討について	56
		Ⅰ. 利用者負担に関する検討の視点	
		1. 所得階層の区分について	57
		2. 所得階層区分の決定方法について	57
		3. 利用者負担の切り替え時期について	58
		4. 多子軽減の取り扱いについて	62
		5. 実費徴収・上乗せ徴収の取り扱いについて	64
		6. その他	66

子ども・子育て新制度における公定価格の概要

- 子ども・子育て支援新制度では、認定こども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付である「施設型給付」及び小規模保育等に対する「地域型保育給付」を創設し、市町村の確認を受けた施設・事業の利用に当たって、財政支援を保障していくこととしている。

※私立保育所に対しては、委託費として支払う。

- 施設型給付費、地域型保育給付費の基本構造は、「内閣総理大臣が定める基準により算定した費用の額」（公定価格）から「政令で定める額を限度として市町村が定める額」（利用者負担額）を控除した額とされる。

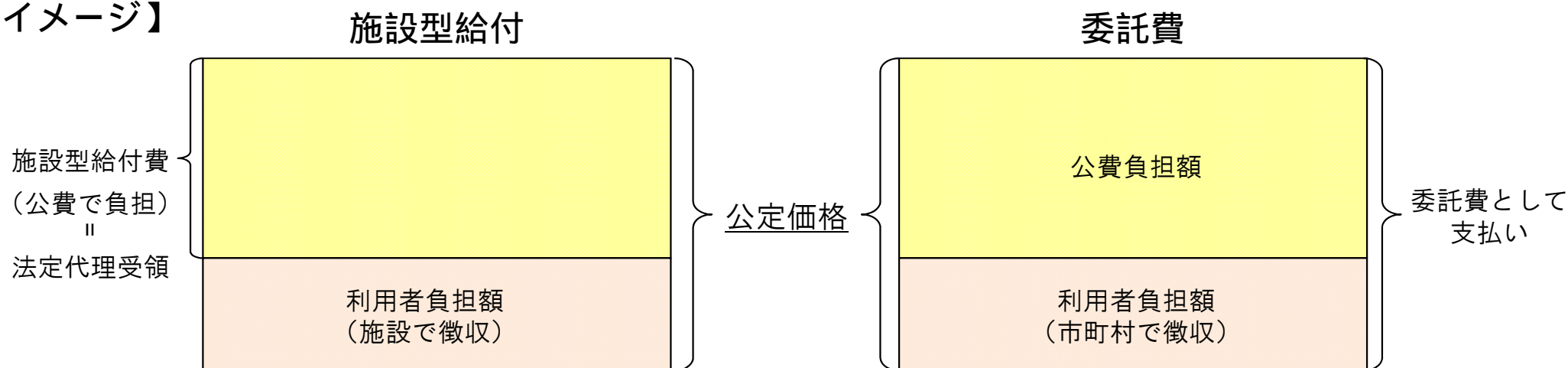
（子ども子育て支援法27条、29条等）

「給付費」＝「公定価格」－「利用者負担額」

※この基本構造は委託費も同様。

- 今後、公定価格及び利用者負担について、具体的な水準等の検討が必要。

【イメージ】

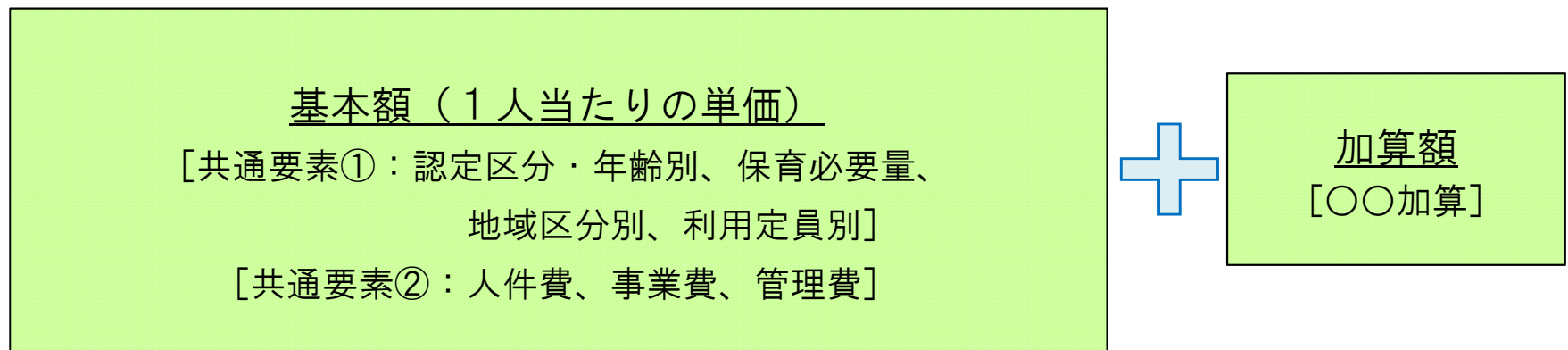


公定価格に関する論点について

1. 公定価格の基本的な構造

- 子ども・子育て新制度における公定価格は、「認定の区分（支援法19条1項1号・2号・3号に掲げる小学校就学前の子どもの区分）」、「保育必要量」、「施設の所在する地域」等の事項を勘案して算定される教育・保育、地域型保育に通常要する費用の額を勘案して内閣総理大臣が定める基準により算定した費用の額、となっている。
- 通常要する費用の算定に当たっては、認可基準等により定められた職員配置基準等に関する水準をベースに、人件費、事業費、管理費といった運営コストがどの程度必要かといった評価を行うことが必要となる。
- 子ども・子育て会議（基準検討部会）における「保育の必要性の認定」、「新幼保連携型認定こども園、地域型保育事業の認可基準」、「確認制度（定員制度、運営基準等）」等に関する一定のとりまとめ等を踏まえ、これらの基準により求められる水準に対応するものとして、公定価格の設定が必要となる。

公定価格（基本額）イメージ



【参考：子ども・子育て支援新制度の施行に向けて検討中の各事項の関係（公定価格関係）】

保育の必要性の認定

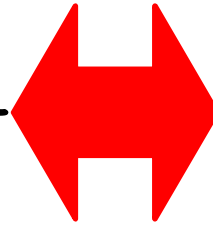
- 給付等の支給に当たって必要な認定の基準等
 - ・ 認定区分
 - ①教育標準時間認定（3歳以上）
 - ②保育認定（3歳以上）、③保育認定（3歳未満）
 - ・ 保育必要量
（保育標準時間・保育短時間）

認可基準等

- 施設・事業の適切な運営を確保するための基準等
 - ・ 職員配置基準
 - ・ 施設基準
 - ・ 施設・事業に求める実施内容等

確認制度

- 公費による財政支援の対象となることを確認するための基準等
 - ・ 利用定員
 - ・ 運営基準



公定価格

- 左の各事項を踏まえ、教育・保育に要する費用を算定

共通要素

- ・ 認定区分・年齢別
- ・ 保育必要量
- ・ 利用定員別
- ・ 地域区分別

共通要素

- ・ 人件費
- ・ 事業費
- ・ 管理費

各種加算等

その他

利用者負担

- ・ 利用者負担の水準
- ・ 実費徴収、上乘せ徴収

参考・本格施行までの現時点での想定イメージ(平成27年度施行を想定)

国で実施 → 自治体で実施

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
主な動き (想定)			4月 消費税8%引き上げ 保育緊急確保事業実施	本格施行(注1) 10月 消費税10%に引き上げ(注2)
基本指針・事業計画		会議等での検討 市町村・都道府県事業計画の検討		
認可基準(幼保連携型 認定こども園)・ 確認基準		会議等での検討	条例の検討 → 認可・確認事務	
保育の必要性の 認定基準		会議等での検討	認定事務	
公定価格	実態調査	実態調査、会議等での検討	骨格、仮単価の提示 意向調査、予算要求 利用者負担の設定	
市町村事業		会議等での検討	条例(注3)の検討 → 届出受理・事業実施準備	
幼保連携型認定こども園 保育要領(仮称)		関係審議会等での検討	ガイドライン等の策定 認定こども園職員に対する研修等	
保育緊急確保事業		対象事業、要綱等の検討 保育計画の改定 (特定市町村)	保育緊急確保事業の実施	
実施体制	子ども・子育て支援新制度施行準備室(内閣府)	自治体において準備組織を設置		子ども・子育て本部(内閣府) 一元の実施体制を整備

子ども
子育て会議設置

地方版も
順次設置

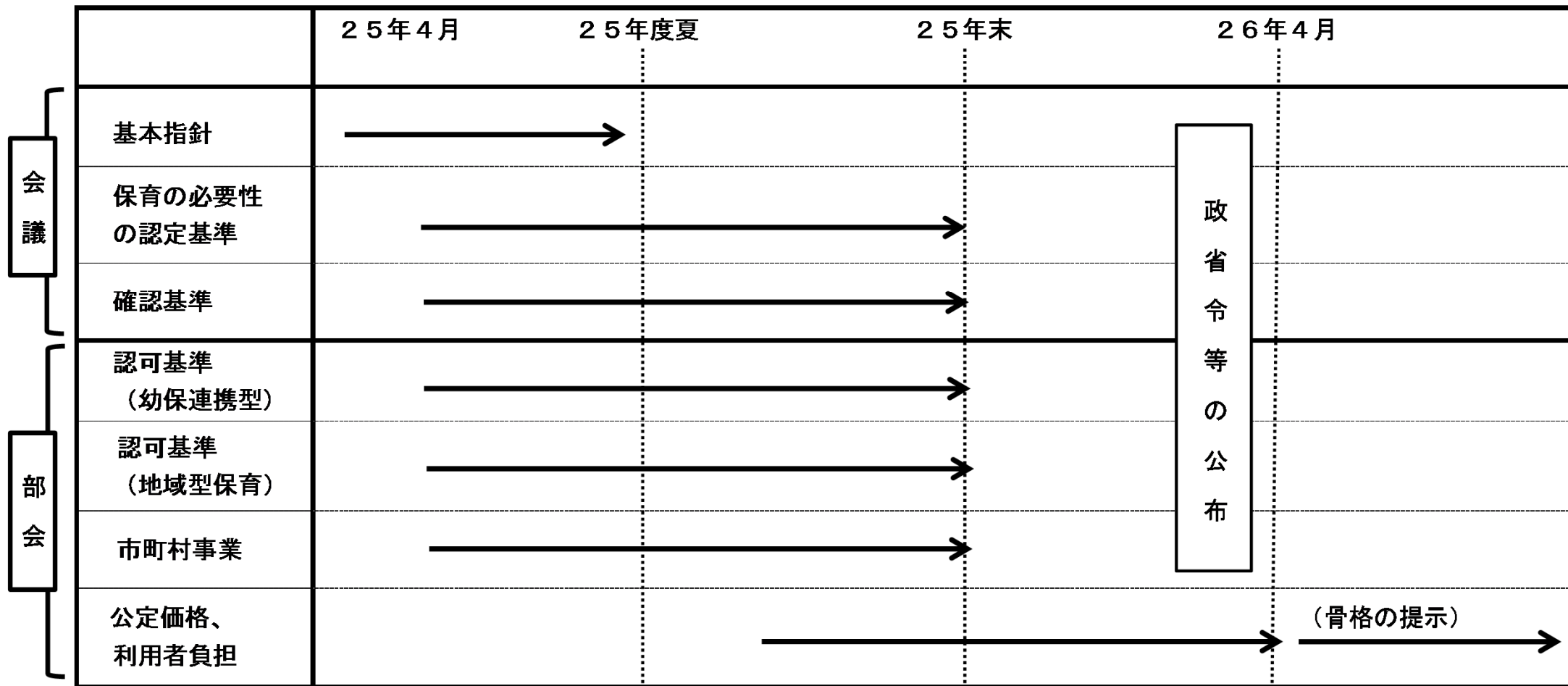
(注1) 本格施行の時期については、実際の消費税率引き上げ時期を踏まえて検討。

(注2) 消費税率の引き上げは、経済状況の好転が条件とされている。

(注3) 地域子ども・子育て支援事業の関係では、放課後児童健全育成事業の基準を条例で定める必要がある。

子ども・子育て会議における主な審議事項とスケジュールのイメージ

子ども・子育て支援新制度は、早ければ、平成27年4月には施行予定である。子ども・子育て支援給付・事業の実施主体となる市町村は、国の基本指針や基準を踏まえて、都道府県とも調整しつつ、市町村の事業計画の策定、基準の検討、必要な条例の制定を行った上で、施行までの事前準備としての認可・確認事務等を行う必要がある。このため、国においては、基本指針や基準等の検討は、その過程を対外的に示しながら、概ね25年度中に終える必要がある（25年度中に関係政省令や告示を公布する必要がある。）。



公定価格の設定に当たっての基本的な考え方

- (1) 公定価格は、法律上「認定の区分（支援法19条1項1号・2号・3号に掲げる小学校就学前子どもの区分）、保育必要量、施設の所在する地域等を勘案して算定される教育・保育、地域型保育に通常要する費用の額を勘案して内閣総理大臣が定める基準により算定した費用の額」とされており、「基本制度」では、「質の確保・向上が図られた学校教育・保育を提供するために必要な水準として、人員配置基準や設備環境を基に、人件費、事業費、管理費等に相当する費用を算定する。」とされている。
- (2) 給付額の算定に当たっては、例えば、例1、2又は例3のような方法が考えられ、それぞれの特徴、留意点は以下のとおり。

例1 個別費目の積み上げ方式（保育所運営費等）

人件費、事業費、管理費等について、各々対象となる費目を積み上げ、費用を算定。

特 徴

- ・ 給付費の中に積み上げる対象項目（国の算定基準）が明確になることから、他の補助事業との組み合わせが実施しやすく、特に人件費については、経験年数に応じた対応や、配置基準の改善等の政策的な上乘せが実施しやすくなる。

留意点

- ・ 実際に事業に要した費用（実態）と積み上げた給付費（モデル）の間にずれが生じる可能性がある。事業費や管理費等については、物価変動等、実態調査の結果を直接反映させる形ではなくなる。

例2 包括的な報酬体系（介護保険制度等）

サービスに要する平均的な費用を実態調査により把握し、人件費、事業費、管理費等を包括的に評価し算定。

特 徴

- ・ 実際に事業に要した費用（実態）に対応した給付費を設定しやすい。事業費や管理費等については、物価変動等、実態調査の結果が直接反映される形になる。

留意点

- ・ 給付費の中に積み上げられた対象項目が必ずしも明確でない部分が出てくるため、他の補助事業との組み合わせや、人件費等の政策的な対応が見えにくくなる。

例3 例1（人件費部分）、例2（事業費、管理費等）の組み合わせ

人件費については、対象となる費目を積み上げ、費用を算定。事業費、管理費等については、サービスに要する平均的な費用を実態調査により把握し、事業費、管理費等を包括的に評価し算定。

特徴

- ・ 人件費については、経験年数に応じた対応や、配置基準の改善等の政策的な上乘せが実施しやすくなり、事業費や管理費等については、物価変動等、実態調査の結果が直接反映される形になる。

留意点

- ・ 人件費については、例1と同様。事業費や管理費等については、給付費の中に積み上げられた対象項目が必ずしも明確でない部分が出てくるため、他の補助事業との組み合わせなどが見えにくくなる。

【検討の視点】

- 新制度施行時に公定価格を設定する段階においては、いずれにせよ対象となる費目を一定程度特定した上で評価することが必要ではないか。
- 上記の例1～例3は、特に公定価格の改定のあり方に関わるものではないか。

(参考) 現行の保育所運営費の費用構成

(基本分保育単価の内訳)

区 分		内 容
事 務 費	人 件 費	(1)常勤職員給与（注） ①本俸、特別給与改善費、特殊業務手当 ②諸手当（扶養手当、地域手当、期末勤勉手当、管理職手当、超過勤務手当、住居手当、通勤手当等） ③社会保険料事業主負担金等（健康保険、厚生年金、労働保険等） (2)非常勤職員雇上費 ①嘱託医手当 ②非常勤職員雇上費 ③年休代替要員費
	管 理 費	<職員の数に比例して積算しているもの> 旅費、庁費、職員研修費、被服手当、職員健康管理費、業務省力化等勤務条件改善費 <児童の数に比例して積算しているもの> 保健衛生費 <1施設当たりの費用として積算しているもの> 補修費、特別管理費、苦情解決対策費
事業費		<生活諸費> 一般生活費（給食材料費、保育材料費等）

(注) 職員数の考え方

- ・ 所 長 1 人（設置単価の場合）
- ・ 保 育 士 保育士配置基準に基づき算定 ※その他、配置基準とは別に保育士を 1 名加配
- 乳 児 3 : 1
- 1 ～ 2 歳児 6 : 1
- 3 歳 児 2 0 : 1
- 4 歳以上児 3 0 : 1
- ・ 調 理 員 2 人（定員 4 0 人以下の場合は 1 人、定員 1 5 1 人以上の場合は 3 人）

その他、今後、検討していく必要があるものとして、例えば、以下のものが考えられる。

○公定価格の表示方法

公定価格を設定するにあたって、その表示方法（価格表示）について、検討していく必要があるが、その際、現行の保育所運営費と同様に「円表示」とするか、他制度の例のように「単位（点数）表示」とするかについて、検討していく必要がある。

○公定価格の改定

公定価格の改定の時期や方法については、地方自治体の事業計画の状況等を踏まえながら、物価など経済状況の変動等に対応できるものとしていく必要があるが、具体的なあり方については公定価格の骨格を整理した上で、別途検討する必要がある。

2．公定価格の個別検討項目について

公定価格の検討に当たって

- 公定価格の検討に当たっては、
 - ・ 国が定める公定価格の「骨格」
 - ・ 利用者負担のあり方
- に関する個別論点について検討することが必要。

公定価格の個別検討項目

- 具体的には、以下の項目について検討することが必要。
 - ・ 共通要素①（価格の算定に当たり、すべての施設・事業に共通して勘案すべき事項）
 - …認定区分・年齢、保育必要量、地域区分、定員規模など
 - ・ 共通要素②（すべての施設・事業に共通する費目）
 - …人件費、事業費、管理費など
 - ・ 各種加算等
 - ・ その他
 - …施設・事業ごとに検討が必要なその他の論点

．共通要素 に関する検討の視点

【概要】

- すべての施設・事業に共通して勘案すべき事項として、認定区分・年齢、保育必要量、地域区分、定員規模などについて検討、整理する。

【主な事項】

1 - 1 . 認定区分との関係

- 公定価格の設定に当たっては、法律上、認定区分を勘案して定めることとされている。

認定区分

- 19条第1項1号に該当する場合：教育標準時間認定（満3歳以上）
- 19条第1項2号に該当する場合：満3歳以上・保育認定
- 19条第1項3号に該当する場合：満3歳未満・保育認定

< 経営実態調査の結果 >

幼稚園・保育所の「入所児童1人当たり支出額」

	幼稚園	保育所
入所児童1人当たり支出額	526千円（176人）＜15.0人＞	935千円（102人）＜22.1人＞
うち入所児童数「～60人」	717千円（41人）＜7.3人＞	1,214千円（43人）＜13.8人＞
うち入所児童数「61人～90人」	564千円（77人）＜9.3人＞	1,005千円（73人）＜17.4人＞

（ ）内は平均入所児童（実員）数、＜ ＞内は常勤換算従事者数（以下同じ。）

入所児童の年齢等の要素は考慮していない数値。

「入所児童1人当たり支出額」は、一時預かり事業や他の受託事業に係る部分を控除した支出総額を計算し、入所児童（実員）数で除して算出している。（以下同じ。）

保育所の「入所児童に占める3歳未満児の構成割合別」の「入所児童1人当たり支出額」

3歳未満児の構成割合	入所児童1人当たり支出額
～20%未満	842千円（94人）＜14.1人＞
20%～40%未満	845千円（110人）＜22.0人＞
40%～60%未満	952千円（101人）＜23.3人＞
60%～	1,508千円（48人）＜17.2人＞

- ・ 調査結果を見ると、「入所児童1人当たり支出額」の傾向としては、幼稚園(主として教育標準時間認定の子どもが利用)よりも保育所(保育認定の子どもが利用)が高く、保育所においては、子どもの総数に占める3歳未満児の構成割合が高くなるにつれ高くなっている。
- ・ また、職員数(常勤換算従事者数)についても、同様の傾向が見られる。
- ・ 要因としては、幼稚園・保育所の経費構造の性質上、人件費の占める割合が高い(7割程度)ことから、それぞれの職員配置の実態・基準(幼稚園に職員の配置基準はないが、保育所は子どもの年齢に応じた保育士配置基準がある。)が大きく影響しているものと考えられる。

【検討の視点】

- 保育認定を受ける子どもに係る公定価格の設定に当たっては、求められる保育士配置基準等を踏まえ、年齢区分(乳児、1、2歳児、3歳児、4歳以上児の4区分)ごとに設けることを基本としてはどうか。
- 教育標準時間認定を受ける子どもについては、そもそも幼稚園に職員の配置基準がないことから、職員配置の実態を踏まえながら(経営実態調査、学校基本調査等を活用)、公定価格の設定に当たっての職員数の考え方と併せて、保育所における取扱いも勘案しつつ、年齢区分の取扱いの検討が必要ではないか。
- その際、質の高い教育・保育の提供という観点から、国会での附帯決議で「三歳児を中心とした職員配置等の見直し」が求められているように、配置基準等の見直しなどの質の改善とセットで議論していく必要があるのではないか。

1 - 2 . 年齢との関係

- 公定価格の設定に当たっては、各年齢ごとに職員配置基準が異なるなど、人件費等の必要経費が異なっている点を踏まえることが必要。

【検討の視点】

- 「1 - 1. 認定区分との関係」の論点でお示したとおり、幼稚園・保育所の経費構造の性質上、人件費の占める割合が高い（7割程度）ことから、職員配置の実態や年齢ごとの保育士配置基準が大きく影響するものと考えられる。
- 保育認定を受ける子どもに係る公定価格の設定に当たっては、求められる保育士配置基準等を踏まえ、年齢区分（乳児、1、2歳児、3歳児、4歳以上児の4区分）ごとに設けることを基本としてはどうか。
- 教育標準時間認定を受ける子どもについては、そもそも幼稚園に職員の配置基準がないことから、職員配置の実態を踏まえながら（経営実態調査、学校基本調査等を活用）、公定価格の設定に当たっての職員数の考え方と併せて、保育所における取扱いも勘案しつつ、年齢区分の取扱いの検討が必要ではないか。
- その際、質の高い教育・保育の提供という観点から、国会での附帯決議で「三歳児を中心とした職員配置等の見直し」が求められているように、配置基準等の見直しなどの質の改善とセットで議論していく必要があるのではないか。

2. 保育必要量との関係

- 公定価格の設定に当たっては、法律上、保育必要量を勘案して定めることとされている。

< 経営実態調査の結果 >

保育所の入所児童の1日当たりの平均利用時間区分別の「入所児童1人当たり支出額」

平均利用時間	入所児童 1人当たり支出額	施設数（構成割合）
8時間未満	881千円（106人）＜18.0人＞	76か所（6.1%）
8時間以上 9時間未満	888千円（103人）＜21.9人＞	400か所（32.1%）
9時間以上10時間未満	981千円（102人）＜22.9人＞	547か所（43.9%）
10時間以上	927千円（99人）＜22.2人＞	224か所（18.0%）

- ・ 調査結果を見ると、入所児童の1日当たりの平均利用時間が長くなるにつれ、「入所児童1人当たり支出額」が増加する傾向が見られる。

【検討の視点】

- 保育認定を受ける子どもに係る公定価格の設定に当たっては、保育必要量の区分（保育標準時間、保育短時間の2区分）ごとに設けることを基本としてはどうか。
- 同時に、保育短時間認定を受ける子どもについては、子どもの利用時間とは別途、職員の勤務の状況、安定的・継続的な運営等にも配慮する必要があるのではないか。

3. 地域区分との関係

- 法律等において、人件費等の違いを考慮し、施設の所在する地域を勘案して公定価格を設定することとされている。

< 経営実態調査の結果 >

地域区分ごとの全職種平均の職員1人当たり給与月額(常勤・非常勤)

地域区分は、保育所運営費が国家公務員の地域手当に準じていることから、本調査では、国家公務員の地域手当の支給地域の区分により調査を実施し、集計も同様の区分により実施した。(支給対象地域は1級地から6級地に区分され、それ以外の地域(その他地域)については地域手当は支給されていない。)

地域区分	私 立 施 設	
	幼稚園	保育所
1 級地 (18%)	304, 807円 (9. 9年)	310, 617円 (9. 7年)
2 級地 (15%)	291, 978円 (10. 0年)	301, 717円 (9. 0年)
3 級地 (12%)	305, 630円 (10. 2年)	281, 565円 (7. 5年)
4 級地 (10%)	276, 987円 (10. 0年)	272, 735円 (8. 1年)
5 級地 (6%)	277, 862円 (9. 4年)	267, 859円 (8. 3年)
6 級地 (3%)	262, 177円 (10. 4年)	253, 833円 (9. 2年)
その他 (0%)	231, 699円 (10. 4年)	248, 560円 (10. 0年)

公 立 施 設	
幼稚園	保育所
432, 135円 (12. 2年)	364, 480円 (16. 1年)
345, 957円 (11. 7年)	296, 506円 (8. 7年)
413, 904円 (15. 4年)	326, 887円 (12. 4年)
375, 054円 (13. 7年)	327, 610円 (16. 5年)
343, 029円 (13. 1年)	300, 276円 (11. 1年)
344, 473円 (14. 0年)	286, 175円 (11. 1年)
313, 962円 (14. 4年)	288, 658円 (13. 2年)

公立施設の賃金水準は、当該市町村の財政状況等にも左右されるため、必ずしもその地域の民間賃金水準を反映したものにはなっていない点に留意が必要。

- ・ 調査結果を見ると、保育所については、地域区分の級地が高くなるにつれ1人当たり給与月額が高くなる傾向にあり、地域ごとの賃金水準の差が表れているものと考えられる。

一方、現在、地域区分を設定していない幼稚園においても、概ね同様の傾向が見られる。

【検討の視点】

- 公定価格の設定に当たっては、地域別の人件費等の違いを考慮することを基本としてはどうか。
- その区分の設定方法については、現行の保育所運営費の地域区分や他制度の状況等も参考に検討してはどうか。
- また、地域区分の見直しのルール（地域の見直し時期）についても、検討していく必要があるのではないか。

論 点 基本的な考え方

- 地域の設定に当たって、現行の保育所運営費は、国家公務員の地域手当（以下「地域手当」という。）の地域区分を基本として設定しており、他制度においても、同様に地域手当の地域区分を基本としている制度が多い。
- また、経営実態調査の結果を見ると、職員1人当たり給与月額の実態が、概ね地域手当の地域区分に即した形になっていること、新制度の実施主体は市町村であることなどを踏まえると、地域の設定に当たっては、地域手当の地域区分を基本としてはどうか。

[補足]

- ・ 区分の呼称については、これまでのご意見を踏まえ、地域手当の「○級地」ではなく、「○区分地」や「○／100地域」などといった呼称としてはどうか。

※ 以下は、地域手当の地域区分を基本とした場合において、検討することが必要と想定される視点

視点1 国の官署が所在しない地域の設定方法について、どう考えていくか。

- 地域手当は、国家公務員に対する手当であることから、市町村の管内に国の官署がないことにより、「その他（無支給地）」地域となっている場合があり、その場合の設定方法を検討する必要がある。

⇒ 現行の保育所運営費や他制度の設定方法を踏まえた検討例は以下のとおり

例1 保育所や児童養護施設などの児童福祉施設等（障害児を含む。）の運営費・措置費の設定方法

- ・ 地域手当の支給地域に約3/4以上周囲を囲まれている地域（首都圏、近畿圏内で市に限る。）^①について、
周辺の対象地域の支給割合を踏まえて^②設定。

例2 介護保険制度や障害福祉サービス等報酬（障害児を除く。）及び医療保険制度の設定方法

- ・ 地域手当の支給地域に囲まれている地域（首都圏等の条件はない。）及び複数の支給地域に隣接している地域^①について、
周辺の対象地域の支給割合の区分のうち最も低い区分^②により設定。

※ 介護保険制度及び障害福祉サービス等報酬は、前回（平成24年度）の報酬改定時に、医療保険制度との整合性の観点等を踏まえ、現行の地域区分に見直している。

- ① 例1では、異なる支給割合の複数の地域に囲まれている場合、支給割合を新たに設定しているため、区分数は8区分（ただし、新たに設定した区域は2市のみ）。一方で例2では、最も低い区分により設定しているため、区分数は地域手当と同様7区分。
- ② 例1では、支給地域に周囲を囲まれている地域を、「首都圏、近畿圏内かつ市のみ」に限定していることから、検討例2と比較して、対象となる市町村数が少なくなる。

視点2 区分を設定する際の市町村域の時点（合併した市町村の取り扱い）について、どう考えていくか。

- 地域手当については、平成18年4月1日時点の市町村域により区分しており、その後に市町村合併があった場合も、その区域の変更をしないこととされている。そのため、支給割合が異なる市町村が合併した場合は、同じ市町村の中でも、地域により支給割合が異なっている。
- 現行の保育所運営費については、地域手当の取り扱いに従い、平成18年4月1日を市町村域の時点としているが、介護保険制度や障害福祉サービス等報酬については、報酬改定の際に直近の市町村合併を反映（支給割合の高い区分を適用）させている。

⇒ 上記を踏まえた検討例は以下のとおり。

例1 地域手当の取り扱いに従い、平成18年4月1日時点の市町村域により設定。

（留意点）同じ市町村の管内に所在する施設・事業所であっても、地域区分が異なる場合がある。

例2 本格施行時の市町村域により設定。

（留意点）市町村合併後においても、地域の状況によっては、同一市町村内で賃金水準が異なる場合もある。

視点3 改定ルール（見直し時期）について、どう考えていくか。

- 公定価格の決定後に、市町村合併が行われた場合や、地域手当の地域区分の見直し（※）が行われた際の公定価格への反映方法について、基本的な改定ルール（見直し時期）を検討する必要がある。

※ 地域手当は、人事院規則の規定により10年ごとに支給地域等を見直すこととされている。

（次回見直しは、平成28年4月1日予定）

- 改定ルールの基本的な考え方としては、公定価格全体の改定時期に合わせて、市町村合併等を反映させていくこととしてはどうか。

(参考1)

各制度の地域区分の比較

		保育所 (児童福祉施設等の措置費等) (障害児を含む。(注1))	介護保険制度 障害者自立支援法 (障害児を除く。(注1))	医療保険制度	義務教育国庫負担制度	国家公務員給与 (地域手当)
基本的考え方		地域手当を基本	地域手当を基本	地域手当を基本	地域手当を基本	
地域区分	地域割り	8区分	7区分	7区分	7区分	7区分
	支給割合	18%、15%、12%、10%、 8%(注2)、6%、3%、0%	18%、15%、12%、10%、 6%、3%、0%	18点、15点、12点、10点、 6点、3点、0点 (注3)	18%、15%、12%、10%、 6%、3%、0%	18%、15%、12%、10%、 6%、3%、0%
	官署所在地	地域手当支給地域	地域手当支給地域	地域手当支給地域	地域手当支給地域	
	対象地域	・支給地域に約3/4以上周囲を囲まれている地域 (首都圏、近畿圏内で市に限る。) ※支給割合は、周辺の対象地域の支給割合を踏まえて設定。	・支給地域に囲まれている地域 ・複数の支給地域に隣接している地域 ※支給割合は、周辺の対象地域の支給割合の区分のうち低い区分により設定。	・支給地域に囲まれている地域 ・複数の支給地域に隣接している地域 ※支給割合は、周辺の対象地域の支給割合の区分のうち低い区分により設定。	・対象外	
	対象となる市町村域の時期	平成18年4月1日	平成24年4月1日 (注4)	平成20年4月1日 (注4)	平成18年4月1日	平成18年4月1日 (注5)

※ 各々の制度において、過去に支給対象地域となっていた市町村については、経過措置を設定している場合がある。

(注1) 障害児については、他の児童福祉施設との整合性の観点から、契約・措置ともに児童福祉施設と同様に設定。

(注2) 官署の所在しない地域は、周辺の対象地域の支給割合を踏まえて設定しているため、複数の支給割合の地域に囲まれている地域について独自に設定。

(注3) 医療保険制度は、報酬単価を割増しするのではなく、加算する仕組み。

(注4) 報酬改定等に合わせて設定。

(注5) 人事院規則の規定により10年ごとに見直すことにされている。(次回見直し平成28年4月1日)

（参考２）国家公務員の地域手当

（地域手当の支給）

- 地域手当は、国家公務員の給与について、地域における民間賃金水準を適切に反映させるため、人事院規則で定める地域に在勤する職員に支給されている。

（国家公務員の地域手当の支給地域の指定）

- ① 地域手当は、当該地域における民間の賃金水準を基礎とし、当該地域における物価等を考慮して、支給地域を指定している。
- ② 具体的には、賃金構造基本統計調査（注）による賃金指数を用いた指定基準を基本として支給地域及び支給割合を決定。

（注）賃金構造基本統計調査は、民間事業者に雇用される労働者の賃金実態を確認する場合に一般的に利用されている。

- ③ 例えば、１級地に区分されている市と６級地に区分されている市では、１級地に区分されている市が６級地に区分されている市よりも民間事業者の賃金指数が高いことになる。

（１級地から６級地以外の地域（その他地域）について）

- 地域手当の支給地域である１級地～６級地以外に区分される市町村については、支給地域に比べ民間事業者の賃金指数が低いことにより「その他」地域とされているほか、当該手当は国家公務員に対する手当であることから、当該地域に国の官署がないことにより「その他」に分類されている場合がある。

（参考３）国家公務員の地域手当の支給地域

級地	都道府県	支給地域
1 級地	東京都	特別区
2 級地	茨城県	取手市
	埼玉県	和光市
	千葉県	成田市 印西市
	東京都	武蔵野市 町田市 国分寺市 国立市 福生市 狛江市 清瀬市 多摩市 稲城市 西東京市
	神奈川県	鎌倉市 厚木市
	大阪府	大阪市 守口市 門真市
3 級地	兵庫県	芦屋市
	茨城県	つくば市
	埼玉県	さいたま市 志木市
	千葉県	船橋市 浦安市 袖ヶ浦市
	東京都	八王子市 立川市 府中市 昭島市 調布市 小平市 日野市
	神奈川県	横浜市 川崎市 海老名市
	愛知県	名古屋市 刈谷市 豊田市
	大阪府	吹田市 高槻市 寝屋川市 箕面市 高石市
	兵庫県	西宮市 宝塚市
	奈良県	天理市
4 級地	茨城県	水戸市 土浦市 守谷市
	埼玉県	鶴ヶ島市
	千葉県	千葉市 市川市 松戸市 富津市 四街道市
	東京都	三鷹市 青梅市 東村山市 あきる野市
	神奈川県	横須賀市 藤沢市 茅ヶ崎市 相模原市 大和市
	愛知県	豊明市
	三重県	鈴鹿市
	滋賀県	大津市 草津市
	京都府	京都市
	大阪府	堺市 東大阪市 豊中市 池田市 枚方市 茨木市 八尾市
	兵庫県	神戸市 尼崎市
	奈良県	奈良市 大和郡山市
	広島県	広島市
	福岡県	福岡市
5 級地	宮城県	仙台市
	茨城県	日立市 古河市 牛久市 ひたちなか市
	栃木県	宇都宮市
	埼玉県	川越市 川口市 行田市 所沢市 飯能市 加須市 東松山市 越谷市 戸田市 入間市 朝霞市 三郷市
	千葉県	茂原市 佐倉市 柏市 市原市 白井市
	神奈川県	平塚市 秦野市
	山梨県	甲府市
	静岡県	静岡市 沼津市 御殿場市
	愛知県	瀬戸市 碧南市 西尾市 大府市 知多市
	三重県	津市 四日市市
	滋賀県	守山市 栗東市
	京都府	宇治市 亀岡市 京田辺市
	大阪府	河内長野市 和泉市 羽曳野市 藤井寺市
	兵庫県	伊丹市 三田市
	奈良県	大和高田市 橿原市
	神奈川県	三浦郡葉山町
	大阪府	岸和田市 泉大津市 貝塚市 泉佐野市 富田林市

級地	都道府県	支給地域
6 級地	北海道	札幌市
	宮城県	名取市 多賀城市
	茨城県	龍ヶ崎市 筑西市
	栃木県	鹿沼市 小山市 大田原市
	群馬県	前橋市 高崎市 太田市
	埼玉県	熊谷市 春日部市 鴻巣市 上尾市 草加市 久喜市 坂戸市 比企郡鳩山町 北埼玉郡北川辺町 北埼玉郡大利根町 北葛飾郡栗橋町 北葛飾郡杉戸町
	千葉県	野田市 東金市 流山市 八街市 印旛郡酒々井町 印旛郡栄町
	東京都	武蔵村山市
	神奈川県	小田原市 三浦市 中郡二宮町
	富山県	富山市
	石川県	金沢市
	福井県	福井市
	長野県	長野市 松本市 諏訪市 塩尻市
	岐阜県	岐阜市 大垣市 多治見市 美濃加茂市
	静岡県	浜松市 三島市 富士宮市 富士市 磐田市 焼津市 掛川市 袋井市
	愛知県	豊橋市 岡崎市 一宮市 半田市 春日井市 津島市 安城市 大山市 江南市 小牧市 稲沢市 東海市 知立市 愛西市 弥富市 西春日井郡豊山町 西加茂郡三好町
	三重県	桑名市 名張市 伊賀市
	滋賀県	彦根市 長浜市
	京都府	向日市 相楽郡木津町
	大阪府	柏原市 泉南市 四條畷市 交野市 阪南市 泉南郡熊取町 泉南郡田尻町 泉南郡岬町 南河内郡太子町
	兵庫県	姫路市 明石市 加古川市 三木市
	奈良県	桜井市 香芝市 宇陀市 生駒郡斑鳩町 北葛城郡王寺町
	和歌山県	和歌山市 橋本市
	岡山県	岡山市
	広島県	廿日市市 安芸郡海田町 安芸郡坂町
	山口県	周南市
	香川県	高松市
	福岡県	北九州市 筑紫野市 春日市 太宰府市 前原市 福津市 糟屋郡宇美町 糟屋郡新宮町 糟屋郡粕屋町
	長崎県	長崎市

※この表の支給地域欄に掲げる名称は、平成18年4月1日においてそれらの名称を有する市、町又は特別区の同日における区域によって示された地域を示し、その後におけるそれらの名称の変更又はそれらの名称を有するものの区域の変更によって影響されるものではない。

4 . 定員規模との関係

- 国会の附帯決議等において、施設の規模による経費構造の違いを考慮して、定員規模別に公定価格を設定することが求められている。

< 経営実態調査の結果 >

定員規模別の「入所児童1人当たり支出額」

(幼稚園)

定員区分	入所児童1人当たり支出額
～ 60人	731千円 (37人) < 6. 4人 >
61人～ 90人	569千円 (64人) < 8. 0人 >
91人～150人	574千円 (97人) <10. 6人 >
151人～210人	509千円 (158人) <14. 4人 >
211人～	489千円 (266人) <20. 2人 >

(保育所)

定員区分	入所児童1人当たり支出額
～ 60人	1, 066千円 (58人) <15. 5人 >
61人～ 90人	892千円 (97人) <21. 3人 >
91人～120人	900千円 (124人) <25. 8 人 >
121人～150人	779千円 (153人) <30. 8人 >
151人～	739千円 (214人) <37. 1人 >

実員規模別の「入所児童1人当たり支出額」

(幼稚園)

実員区分	入所児童1人当たり支出額
～ 60人	717千円 (41人) < 7. 3人 >
61人～ 90人	564千円 (77人) < 9. 3人 >
91人～150人	533千円 (118人) <12. 2人 >
151人～210人	488千円 (181人) <16. 0人 >
211人～	464千円 (303人) <22. 7人 >

(保育所)

実員区分	入所児童1人当たり支出額
～ 60人	1, 214千円 (43人) <13. 8人 >
61人～ 90人	1, 005千円 (73人) <17. 4人 >
91人～120人	860千円 (105人) <23. 4人 >
121人～150人	802千円 (136人) <27. 5人 >
151人～	750千円 (196人) <35. 2人 >

- ・ 調査結果を見ると、保育所については、定員規模別、実員規模別のいずれも、規模が大きくなるにつれて、入所児童1人当たりの支出額は低くなる傾向にある。幼稚園も、概ね同様。

【検討の視点】

- 公定価格の設定に当たっては、定員・実員規模別の経費構造等の違いを考慮し、定員区分別に設定することを基本としてはどうか。また、その定員区分については、市町村が確認する教育・保育施設や地域型保育事業の利用定員を用いることを基本としてはどうか。
- その具体的な定員区分の設定（定員の刻み方等）については、実際の現在の幼稚園・保育所の定員や実員の分布状況等を踏まえ、検討してはどうか。
- その際、保育認定を受ける子どもに係る定員区分については、現行の保育所運営費の取り扱いを踏まえて検討していくことが必要ではないか。

（参考）現行の保育所運営費の定員設定の経緯

保育所運営費の定員区分については、平成20年度までは、「30人単位」としていたが、会計検査院からの指摘等を踏まえ、平成21年度から「定員10人単位」に変更している。

※ 保育所では、定員の範囲内での入所を原則としているが、待機児童が発生している状況等を踏まえ、設備運営基準の範囲内で、定員を超過しての受入を可能とする「定員の弾力化」の取組が行われており、その場合は、本来の定員区分に基づき適用される単価により支弁されることになる。（保育単価は定員規模が大きくなるにつれ単価が小さくなるが、例えば「定員80人」の施設に「90人」の子どもが入所している場合には、「定員区分80人」の単価により「90人分」の費用が支弁される。）

そのため、定員を超えている状況が恒常的に亘る場合には、定員の見直しに積極的に取り組むこととされており、その定員の見直しの取組を阻害しないよう、「定員30人単位」から「定員10人単位」に変更した。（定員を見直した場合の単価の変動による影響が少なくなる。）

- また、教育標準時間認定を受ける子どもに係る定員区分について、幼稚園には「最低定員」がないことにも留意が必要ではないか。

- 認定こども園については、教育標準時間認定の子どもと保育認定の子どもが一つの施設に存在し、それぞれ求められる職員の配置や、経費の違いがある（調理員や食事の費用等）こと等を踏まえて検討する必要があるのではないか。

※ 現行、幼保連携型認定こども園に対する保育所運営費の算定に当たっては、経費構造に違いがあることを踏まえ、保育所のみの方員区分を用いて算定している。

（参考）現行の幼保連携型特例認可保育所に対する取り扱い

幼保連携型特例認可保育所（＊）に対する保育所運営費の算定に当たっては、当該施設は本来、保育所単体では認可されない定員規模の小さい施設（幼稚園に付随する施設という位置づけ）である点を踏まえて、「①幼稚園と保育所の定員を合算した定員区分による単価」または「②保育所のみの方員区分による単価に75％を乗じた単価」とを比較して、高い単価により支弁されている。

※ 基本的には、②による単価が高くなる。

※ 規模の小さい施設であることから、嘱託医や事務職員等幼稚園と重複する職員については、専任の職員を置く必要性が薄いことからそれらの費用を考慮して75％を乗じている。

＊ 幼保連携型特例認可保育所

保育所は定員20人以上が要件となっているが、幼保連携施設を構成する保育所の場合、幼稚園と保育所の定員の合計が20人以上である場合に保育所の方員が10人以上であれば認可を可能とするなどの特例を設けている。

- 地域型保育事業の方員区分の設定に当たっては、
- ・ 「小規模保育」については、定員6～19人の小規模な事業であることを踏まえ、定員区分について、どのように考えるか。
 - ・ 「事業所内保育」については、定員区分の上限・下限がない事業であり、また、「地域枠の子ども」と、「従業員の子ども」が存在するため、そのような点も考慮する必要があるのではないか。
 - ・ 「家庭的保育」については、定員6人未満の事業であるため、定員区分を設ける必要はあるか。
- ※ 「居宅訪問型保育」は、基本的に1対1での利用が基本となる。

幼稚園・保育所・認定こども園

＜保育認定を受ける子ども＞ →参考1・2を参照

- 現行の保育所運営費の定員区分については、平成21年度から「10人単位」に変更している。
- また、定員を超えて児童を受け入れている「定員の弾力化」を実施している保育所が約7割（公営5割、私営8割）存在するなど、保育需要が急増する中での「定員の弾力化」の果たしている役割を踏まえると、定員の見直しに取り組みやすい「10人単位」としてはどうか。
- 定員区分の最大値について、現行の保育所運営費では「171人以上」としており、定員及び実員別の施設の分布状況をみても、該当する施設は定員・実員ともに概ね5%程度であるため、同様に「171人以上」を最大値としてはどうか。

＜教育標準時間認定を受ける子ども＞ →参考1・2を参照

- 幼稚園は学級が基本的な生活集団の単位であること、年度途中で園児が大幅に増加することはあまり考えられないこと、定員超過の施設は大都市部等を除けば限られていることを踏まえ、例えば「30人単位」程度の定員区分の刻みとしてはどうか。また、定員規模が比較的小さい施設については、運営実態に即した公定価格となるよう、よりきめ細かな刻みとすることも検討してはどうか。
- 定員区分の最大値については、保育認定を受ける子どもの考え方を参考に、実員別の施設の分布状況において、該当する施設が概ね5%程度となる区分を最大値とすることが考えられるのではないか。

地域型保育事業

＜保育認定を受ける子ども＞

- 「小規模保育」については、定員6～19人の事業であることから、例えば、「6～9人、10～19人」又は、「6～12人、13人～19人」のように、2区分程度の設定を行うことを基本としてはどうか。
- 「事業所内保育」については、実際の定員分布・実員分布（→参考3を参照）をみると、定員・実員ともに60人未満の施設が95%程度を占めている。また、定員の下限のない事業であることから、定員20人未満について「小規模保育」と同様に2区分程度設け、定員20人以上については、施設型給付と同様に「10人単位」とし、「61人以上」を最大値としてはどうか。
また、「地域枠の子ども」と「従業員の子ども」で求められる認可基準に違いはないことから、定員の数え方については「合計の人数」により区分することとしてはどうか。
- 「家庭的保育」及び「居宅訪問型保育」については、その性格上、定員区分を設けないこととしてはどうか。

論点2

認定区分の異なる子どもが利用する施設の取り扱いについて、どう考えるか。

<保育認定を受ける子ども>

- 保育認定を受ける子どもについては、満3歳以上と満3歳未満により認定区分が異なることになるが、固定的な経費（調理員の人件費等）は、基本的に同様になるため、定員数の数え方については、満3歳以上・満3歳未満の「合計の人数」によることとしてはどうか。

<認定こども園>

- 認定こども園については、教育標準時間認定の子どもと保育認定の子どもの定員が一つの施設に存在し、固定的な経費（調理員の人件費等）の違いがあることについて、どう考えるか。
また、教育標準時間認定を受ける子どもと保育認定を受ける子どもにまたがる経費となる部分、重複する職員（園長や事務職員の人件費等）等の取り扱いについて、どのように考えるか。

(参考1) 幼稚園と保育所の定員分布

定員区分	保 育 所			
	公立	私立	計	構成割合 (全体)
～ 20	か所 66	か所 199	か所 265	1. 22%
21 ～ 30	325	476	801	3. 68%
31 ～ 40	203	254	457	2. 10%
41 ～ 50	770	778	1, 548	7. 12%
51 ～ 60	1, 441	2, 368	3, 809	17. 51%
61 ～ 70	438	431	869	4. 00%
71 ～ 80	542	495	1, 037	4. 77%
81 ～ 90	1, 521	2, 621	4, 142	19. 04%
91 ～ 100	655	474	1, 129	5. 19%
101 ～ 110	549	348	897	4. 12%
111 ～ 120	1, 255	1, 765	3, 020	13. 88%
121 ～ 130	326	216	542	2. 49%
131 ～ 140	241	197	438	2. 01%
141 ～ 150	488	666	1, 154	5. 31%
151 ～ 160	133	149	282	1. 30%
161 ～ 170	93	91	184	0. 85%
小計 (～170)	9, 046	11, 528	20, 574	94. 59%

小計 (171～)	441	736	1, 177	5. 41%
171 ～ 180	147	196	343	1. 58%
181 ～ 190	51	44	95	0. 44%
191 ～ 200	95	161	256	1. 18%
201 ～ 210	32	60	92	0. 42%
211 ～ 220	28	51	79	0. 36%
221 ～ 230	21	34	55	0. 25%
231 ～ 240	19	37	56	0. 26%
241 ～ 250	16	47	63	0. 29%
251 ～ 260	7	17	24	0. 11%
261 ～ 270	11	14	25	0. 11%
271 ～ 280	7	13	20	0. 09%
281 ～ 290	2	3	5	0. 02%
291 ～ 300	5	25	30	0. 14%
301 ～ 310	0	5	5	0. 02%
311 ～ 320	0	5	5	0. 02%
321 ～ 330	0	7	7	0. 03%
331 ～ 340	0	1	1	0. 00%
341 ～ 350	0	5	5	0. 02%
351 ～ 360	0	3	3	0. 01%
361 ～ 370	0	2	2	0. 01%
371 ～ 380	0	0	0	0. 00%
381 ～ 390	0	0	0	0. 00%
391 ～ 400	0	3	3	0. 01%
401 ～ 410	0	1	1	0. 00%
411 ～ 420	0	0	0	0. 00%

幼 稚 園			
公立	私立	計	構成割合 (全体)
か所 50	か所 8	か所 58	0. 44%
120	13	133	1. 02%
342	57	399	3. 06%
63	36	99	0. 76%
257	65	322	2. 47%
739	192	931	7. 14%
240	384	624	4. 78%
339	170	509	3. 90%
200	265	465	3. 57%
378	353	731	5. 60%
227	509	736	5. 64%
129	65	194	1. 49%
552	401	953	7. 31%
74	174	248	1. 90%
164	487	651	4. 99%
69	128	197	1. 51%
3, 943	3, 307	7, 250	55. 59%

923	4, 870	5, 793	44. 41%
244	465	709	5. 44%
25	117	142	1. 09%
101	635	736	5. 64%
239	412	651	4. 99%
18	70	88	0. 67%
12	70	82	0. 63%
43	495	538	4. 12%
45	158	203	1. 56%
20	112	132	1. 01%
15	152	167	1. 28%
58	466	524	4. 02%
7	47	54	0. 41%
11	169	180	1. 38%
6	114	120	0. 92%
27	363	390	2. 99%
3	39	42	0. 32%
4	50	54	0. 41%
24	130	154	1. 18%
3	126	129	0. 99%
0	29	29	0. 22%
3	40	43	0. 33%
5	67	72	0. 55%
3	144	147	1. 13%
0	27	27	0. 21%
6	90	96	0. 74%

定員区分	保 育 所			
	公立	私立	計	構成割合 (全体)
421 ～ 430	か所 0	か所 1	か所 1	0. 00%
431 ～ 440	0	1	1	0. 00%
441 ～ 450	0	0	0	0. 00%
451 ～ 460	0	0	0	0. 00%
461 ～ 470	0	0	0	0. 00%
471 ～ 480	0	0	0	0. 00%
481 ～ 490	0	0	0	0. 00%
491 ～ 500	0	0	0	0. 00%
501 ～ 510	0	0	0	0. 00%
511 ～ 520	0	0	0	0. 00%
521 ～ 530	0	0	0	0. 00%
531 ～ 540	0	0	0	0. 00%
541 ～ 550	0	0	0	0. 00%
551 ～ 560	0	0	0	0. 00%
561 ～ 570	0	0	0	0. 00%
571 ～ 580	0	0	0	0. 00%
581 ～ 590	0	0	0	0. 00%
591 ～ 600	0	0	0	0. 00%
601 ～ 610	0	0	0	0. 00%
611 ～ 620	0	0	0	0. 00%
621 ～ 630	0	0	0	0. 00%
631 ～ 640	0	0	0	0. 00%
641 ～ 650	0	0	0	0. 00%
651 ～ 660	0	0	0	0. 00%
661 ～ 670	0	0	0	0. 00%
671 ～ 680	0	0	0	0. 00%
681 ～ 690	0	0	0	0. 00%
691 ～ 700	0	0	0	0. 00%
701 ～ 710	0	0	0	0. 00%
711 ～ 720	0	0	0	0. 00%
721 ～ 730	0	0	0	0. 00%
731 ～ 740	0	0	0	0. 00%
741 ～ 750	0	0	0	0. 00%
751 ～ 760	0	0	0	0. 00%
761 ～ 770	0	0	0	0. 00%
771 ～ 780	0	0	0	0. 00%
781 ～ 790	0	0	0	0. 00%
791 ～ 800	0	0	0	0. 00%
⋮				
841 ～ 850	0	0	0	0. 00%
⋮				
951 ～ 960	0	0	0	0. 00%

合 計	9, 487	12, 264	21, 751	100. 00%
-----	--------	---------	---------	----------

幼 稚 園			
公立	私立	計	構成割合 (全体)
か所 0	か所 7	か所 7	0. 05%
0	32	32	0. 25%
0	17	17	0. 13%
0	23	23	0. 18%
0	11	11	0. 08%
0	58	58	0. 44%
0	12	12	0. 09%
0	21	21	0. 16%
0	7	7	0. 05%
0	21	21	0. 16%
1	12	13	0. 10%
0	0	0	0. 00%
0	4	4	0. 03%
0	7	7	0. 05%
0	3	3	0. 02%
0	1	1	0. 01%
0	3	3	0. 02%
0	12	12	0. 09%
0	0	0	0. 00%
0	2	2	0. 02%
0	6	6	0. 05%
0	7	7	0. 05%
0	1	1	0. 01%
0	1	1	0. 01%
0	4	4	0. 03%
0	1	1	0. 01%
0	0	0	0. 00%
0	1	1	0. 01%
0	0	0	0. 00%
0	0	0	0. 00%
0	0	0	0. 00%
0	1	1	0. 01%
0	0	0	0. 00%
0	0	0	0. 00%
0	1	1	0. 01%
0	1	1	0. 01%
0	1	1	0. 01%
0	1	1	0. 01%
0	1	1	0. 01%

4, 866	8, 177	13, 043	100. 00%
--------	--------	---------	----------

※ 保育所は平成23年度社会福祉施設等調査より
※ 幼稚園は平成25年度学校基本調査より

(参考2) 幼稚園と保育所の実員分布

実員区分	保 育 所			
	公立	私立	計	構成割合 (全体)
～ 20	か所 479	か所 167	か所 646	2.97%
21 ～ 30	495	305	800	3.68%
31 ～ 40	547	470	1,017	4.68%
41 ～ 50	641	551	1,192	5.49%
51 ～ 60	712	663	1,375	6.33%
61 ～ 70	816	1,178	1,994	9.18%
71 ～ 80	755	1,234	1,989	9.16%
81 ～ 90	709	688	1,397	6.43%
91 ～ 100	839	966	1,805	8.31%
101 ～ 110	877	1,463	2,340	10.77%
111 ～ 120	642	783	1,425	6.56%
121 ～ 130	562	723	1,285	5.92%
131 ～ 140	417	740	1,157	5.33%
141 ～ 150	277	632	909	4.18%
151 ～ 160	177	347	524	2.41%
161 ～ 170	143	277	420	1.93%
小計(～170)	9,088	11,187	20,275	93.34%

小計(171～)	385	1,061	1,446	6.66%
171 ～ 180	122	262	384	1.77%
181 ～ 190	80	163	243	1.12%
191 ～ 200	46	127	173	0.80%
201 ～ 210	41	105	146	0.67%
211 ～ 220	28	81	109	0.50%
221 ～ 230	20	50	70	0.32%
231 ～ 240	16	59	75	0.35%
241 ～ 250	11	46	57	0.26%
251 ～ 260	9	33	42	0.19%
261 ～ 270	3	26	29	0.13%
271 ～ 280	3	22	25	0.12%
281 ～ 290	3	17	20	0.09%
291 ～ 300	2	16	18	0.08%
301 ～ 310	1	14	15	0.07%
311 ～ 320	0	9	9	0.04%
321 ～ 330	0	5	5	0.02%
331 ～ 340	0	3	3	0.01%
341 ～ 350	0	6	6	0.03%
351 ～ 360	0	4	4	0.02%
361 ～ 370	0	5	5	0.02%
371 ～ 380	0	1	1	0.00%
381 ～ 390	0	3	3	0.01%
391 ～ 400	0	0	0	0.00%
401 ～ 410	0	1	1	0.00%
411 ～ 420	0	0	0	0.00%

幼 稚 園			
公立	私立	計	構成割合 (全体)
か所 878	か所 173	か所 1,051	8.36%
493	201	694	5.52%
475	249	724	5.76%
451	295	746	5.93%
417	315	732	5.82%
367	335	702	5.58%
293	374	667	5.31%
260	365	625	4.97%
192	338	530	4.22%
167	318	485	3.86%
119	321	440	3.50%
112	290	402	3.20%
96	303	399	3.17%
62	267	329	2.62%
45	305	350	2.78%
47	291	338	2.69%
4,474	4,740	9,214	73.30%

136	3,221	3,357	26.70%
39	264	303	2.41%
24	237	261	2.08%
23	255	278	2.21%
9	255	264	2.10%
6	190	196	1.56%
4	184	188	1.50%
5	157	162	1.29%
5	163	168	1.34%
3	133	136	1.08%
5	135	140	1.11%
1	125	126	1.00%
3	121	124	0.99%
5	106	111	0.88%
3	103	106	0.84%
0	106	106	0.84%
0	69	69	0.55%
0	64	64	0.51%
1	51	52	0.41%
0	50	50	0.40%
0	60	60	0.48%
0	47	47	0.37%
0	68	68	0.54%
0	37	37	0.29%
0	35	35	0.28%
0	31	31	0.25%

実員区分	保 育 所			
	公立	私立	計	構成割合 (全体)
421 ～ 430	か所 0	か所 0	か所 0	0.00%
431 ～ 440	0	0	0	0.00%
441 ～ 450	0	0	0	0.00%
451 ～ 460	0	1	1	0.00%
461 ～ 470	0	1	1	0.00%
471 ～ 480	0	0	0	0.00%
481 ～ 490	0	0	0	0.00%
491 ～ 500	0	0	0	0.00%
501 ～ 510	0	0	0	0.00%
511 ～ 520	0	1	1	0.00%
521 ～ 530	0	0	0	0.00%
531 ～ 540	0	0	0	0.00%
541 ～ 550	0	0	0	0.00%
551 ～ 560	0	0	0	0.00%
561 ～ 570	0	0	0	0.00%
571 ～ 580	0	0	0	0.00%
581 ～ 590	0	0	0	0.00%
591 ～ 600	0	0	0	0.00%
601 ～ 610	0	0	0	0.00%
611 ～ 620	0	0	0	0.00%
621 ～ 630	0	0	0	0.00%
631 ～ 640	0	0	0	0.00%
641 ～ 650	0	0	0	0.00%
651 ～ 660	0	0	0	0.00%
661 ～ 670	0	0	0	0.00%
671 ～ 680	0	0	0	0.00%
681 ～ 690	0	0	0	0.00%
691 ～ 700	0	0	0	0.00%
701 ～ 710	0	0	0	0.00%
711 ～ 720	0	0	0	0.00%
721 ～ 730	0	0	0	0.00%
731 ～ 740	0	0	0	0.00%
741 ～ 750	0	0	0	0.00%
751 ～ 760	0	0	0	0.00%
761 ～ 770	0	0	0	0.00%
771 ～ 780	0	0	0	0.00%
781 ～ 790	0	0	0	0.00%
791 ～ 800	0	0	0	0.00%
∴				
880 ～ 890	0	0	0	0.00%
∴				
1,080 ～ 1,090	0	0	0	0.00%

合 計	9,473	12,248	21,721	100.00%
実員不詳	14	16	30	実員0人

幼 稚 園			
公立	私立	計	構成割合 (全体)
か所 0	か所 23	か所 23	0.18%
0	14	14	0.11%
0	24	24	0.19%
0	10	10	0.08%
0	11	11	0.09%
0	18	18	0.14%
0	13	13	0.10%
0	10	10	0.08%
0	6	6	0.05%
0	9	9	0.07%
0	4	4	0.03%
0	3	3	0.02%
0	3	3	0.02%
0	1	1	0.01%
0	2	2	0.02%
0	3	3	0.02%
0	1	1	0.01%
0	2	2	0.02%
0	5	5	0.04%
0	1	1	0.01%
0	2	2	0.02%
0	4	4	0.03%
0	1	1	0.01%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	1	1	0.01%
0	1	1	0.01%
0	1	1	0.01%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	0	0	0.00%
0	1	1	0.01%
0	0	0	0.00%
0	1	1	0.01%

合 計	4,610	7,961	12,571	100.00%
実員不詳	256	216	472	実員0人

※ 保育所は平成23年度社会福祉施設等調査より
※ 幼稚園は平成25年度学校基本調査より

(参考3) 事業所内保育施設の定員分布・実員分布

定員区分	施設数	構成割合
～5人	20	2.8%
6人	8	1.1%
7人	1	0.1%
8人	9	1.3%
9人	17	2.4%
10人	48	6.8%
11人	6	0.8%
12人	19	2.7%
13人	14	2.0%
14人	2	0.3%
15人	66	9.3%
16人	14	2.0%
17人	8	1.1%
18人	13	1.8%
19人	9	1.3%
20人	85	12.0%
21人～30人	186	26.2%
31人～40人	66	9.3%
41人～50人	56	7.9%
51人～60人	24	3.4%
61人～70人	8	1.1%
71人～80人	8	1.1%
81人～90人	6	0.8%
91人～100人	4	0.6%
101人～110人	3	0.4%
111人～120人	3	0.4%
121人～130人	1	0.1%
131人～140人	1	0.1%
141人～150人	0	0.0%
151人～160人	2	0.3%
161人～170人	0	0.0%
171人～	4	0.6%
小計	711	100.0%
定員未設定	275	—
合計	986	—

94.4%

5.6%

実員区分	施設数	構成割合
～5人	105	10.6%
6人	33	3.3%
7人	35	3.5%
8人	31	3.1%
9人	40	4.1%
10人	42	4.3%
11人	38	3.9%
12人	39	4.0%
13人	36	3.7%
14人	32	3.2%
15人	34	3.4%
16人	27	2.7%
17人	26	2.6%
18人	23	2.3%
19人	21	2.1%
20人	30	3.0%
21人～30人	175	17.7%
31人～40人	99	10.0%
41人～50人	50	5.1%
51人～60人	27	2.7%
61人～70人	13	1.3%
71人～80人	7	0.7%
81人～90人	4	0.4%
91人～100人	6	0.6%
101人～110人	4	0.4%
111人～120人	0	0.0%
121人～130人	0	0.0%
131人～140人	1	0.1%
141人～150人	0	0.0%
151人～160人	1	0.1%
161人～170人	1	0.1%
171人～	6	0.6%
合計	986	100.0%

95.6%

4.4%

※平成21年地域児童福祉事業等調査より

・共通要素 に関する検討の視点

【概要】

- 人件費・事業費・管理費といった、すべての施設・事業に共通する費目に関して、検討、整理する。

【主な事項】

1. 人件費に係る事項について

職員配置について

【検討の視点】

- 職員の配置については、国会での附帯決議で「3歳児を中心とした職員配置等の見直し」が求められているが、これについて、どう考えるか。
- 幼稚園については、現行、学級編制基準はあるが職員配置基準がないことについて、どのように考えていくか。
- 幼稚園の実際の学級規模が、学級編制基準（原則1学級35人以下）より大幅に下回って（小規模編制となつて）おり、さらに4・5歳児学級と比較して3歳児学級がより小規模な編制となっている現状を踏まえ、どのように考えるか。また、学級担任以外の教諭等についても、どのように考えていくか。

(参考)

平成22年度学校基本調査、学校教員統計調査より

- ・1学級当たりの園児数：3歳児19.8人、4歳児24.0人、5歳児24.7人
- ・担任1人当たりの園児数：3歳児15.8人、4歳児23.0人、5歳児23.8人 混合学級については、各学齢に按分
- ・学級を担任している教員数：77,508人、学級を担任していない教員数：22,675人

平成13年3月の「幼児教育振興プログラム」(平成13年3月29日文部科学大臣決定)においてチーム保育(1学級の保育を、2人以上の保育者が役割を分担して担当)の実施のための条件整備が定められ、公立・私立ともに学級担任以外の教員の配置を推進してきた。

＜「幼児教育振興プログラム」(概要)(平成13年3月29日文部科学大臣決定)＞

【幼稚園教育の振興】

(1)教育活動・教育環境の充実

幼稚園教育要領の理解の推進、道徳性の芽生えを培う教育の充実、チーム保育の実施のための条件整備や幼稚園教員の資質向上を図ります。

- その上で、幼稚園教諭に係る配置の改善について、どのように考えていくか。
- 保育士、保育教諭に係る配置の改善について、どのように考えていくか。
 - ※ 仮に認可基準に規定する形により配置基準の改善を行う場合、基準に基づくルールとなることで、確実な配置の改善が可能となる。
 - ※ ただし、職員配置数を満たせない場合、基準違反となるため、保育士等の確保の観点を含め、すべての施設等において対応することが可能か留意が必要。公定価格上の加算により、実際の配置状況に柔軟に対応する方法も考えられるか。
- 新幼保連携型認定こども園については、「満3歳以上の子どもの教育課程に係る教育時間を含め、保育所と同様に職員配置基準を設定する」方向で検討されているが、具体的な配置基準について、どう考えるか。
- 幼稚園において、原則必置である教頭や、事務職員についても実際の配置状況を踏まえ、どのように考えていくか。

平成24年度学校基本調査

・幼稚園数 13,170園（うち公立4,924園、うち私立8,197園）

副園長 2,861人（うち公立432人、うち私立2,392人） 教頭 1,857人（うち公立749人、うち私立1,093人）

事務職員 9,389人（うち公立163人、うち私立9,198人） 以上全て本務者
- 保育所については、所長が必置とはされておらず、保育所運営費において所長設置・未設置別の単価を設けているところであるが、現行、99%の施設において常勤専従の形で所長を置いていることを踏まえ、どのように考えるか。
- その他の職員の配置について、例えば、子どもの健康管理、食育の推進、事務の処理、諸作業への対応等の観点から、公定価格上、どのように考えていくか。

（参考）施設・事業別の職員配置基準

	幼稚園	保育所	認定こども園			
			（新）幼保連携型	幼稚園型	保育所型	地方裁量型
教育・保育従事者	・教諭	・保育士	・保育教諭	・保育に従事する者 （満3歳未満） 保育士資格 （満3歳以上） 幼稚園教諭免許及び保育士資格の両方を持つことが望ましい。ただし、学級担任は幼稚園教諭免許、長時間利用児は保育資格が必要		
教育・保育従事者の員数	配置基準は無し ※学級を編制（1学級あたり幼児数は原則35人以下）	乳児 3：1 1,2歳児 6：1 3歳児 20：1 4歳以上児 30：1	公定価格の議論を踏まえて検討	短時間利用児：35人につき1人 長時間利用児：保育所と同じ		
その他の職員	（必置職員） ・園長、教頭 ・学校医・学校歯科医・学校薬剤師 （置くことができる職員） ・副園長 ・主幹教諭・指導教諭 ・養護教諭 ・栄養教諭 ・事務職員 ・養護助教諭等	（必置職員） ・嘱託医 ・調理員（調理業務全委託の場合を除く（*））	（必置職員） ・園長 ・学校医・学校歯科医・学校薬剤師 （置くことができる職員） ・副園長・教頭 ・主幹保育教諭・指導保育教諭 ・主幹養護教諭・養護教諭 ・主幹栄養教諭・栄養教諭 ・事務職員 ・養護助教諭等	※幼稚園型、保育所型の認可施設部分については、それぞれ幼稚園、保育所と同様。		

	小規模保育			家庭的保育	事業所内保育	居宅訪問型保育
	A型	B型	C型			
保育従事者	・保育士	・保育士 ・保育士以外の保育従事者	・家庭的保育者 （＋家庭的保育補助者）	・家庭的保育者 （＋家庭的保育補助者）	・定員20名以上 保育所と同様	必要な研修を終了し、保育士、保育士と同等以上の知識及び経験を有すると市町村長が認める者
保育従事者の員数	乳児 3：1 1,2歳児 6：1 ＋1人	・A型と同様 ※うち1/2は保育士	0～2歳児 3：1 ※補助者を置く場合 5：2	0～2歳児 3：1 ※補助者を置く場合 5：2	・定員19名以下 小規模保育（A・B型）と同様	0～2歳児 1：1
その他の職員	・嘱託医 ・調理員（*）	・嘱託医 ・調理員（*）	・嘱託医 ・調理員（*）	公定価格の議論を踏まえて検討		公定価格の議論を踏まえて検討

※一部特例有り

処遇改善、経験年数等に応じた公定価格上の評価、キャリアアップについて

【検討の視点】

- これまでの部会における議論においては、職員 1 人当たりの給与月額を見ると、幼稚園教諭、保育士については、民間の他の職種と比較して低い傾向が見られることが明らかとなっている。
- 国会での附帯決議等において、新制度による質の改善として、職員の定着・確保を図っていくため、職員の処遇改善について検討していくことが求められているが、これについて、どう考えていくか。
- 特に、新制度においては、施設・事業に対し、常勤・非常勤別、勤続年数・経験年数等といった学校教育・保育の質に関わる情報の公表を求めることとしており、これらの要素を公定価格に反映される仕組みについて、どう考えていくか。
- その際、現行の保育所運営費における民改費の仕組みとの関係や、平成 24 年度補正予算に基づく保育士等処遇改善臨時特例事業との関係について、どう考えていくか。
- また、他の職種と比較して幼稚園教諭、保育士の平均勤続年数は短い傾向にあるが、「長く働くことができる」職場を構築していくために、処遇改善と併せ、キャリアアップの仕組みについて、どう考えていくか。

例) 中核的な職員の地位・処遇、研修体制の充実による専門性の向上等

※ 民改費及び保育士等処遇改善臨時特例事業の概要については、P 36 参考 2 を参照
介護保険制度における処遇改善の仕組みについては、P 37 参考 3 を参照

(参考1) 職員1人当たり給与月額(経営実態調査)

①幼稚園

私立施設	全 体	幼稚園(認定こども園以外)	幼保連携型	幼稚園型
全職種(常勤・非常勤)	261,840円(10.2年)	263,340円(10.3年)	250,752円(9.1年)	236,695円(9.8年)
園長(常勤)	504,017円(27.4年)	505,869円(27.1年)	499,649円(29.1年)	455,990円(32.3年)
教諭(常勤)	252,348円(7.2年)	253,839円(7.3年)	240,405円(6.4年)	229,264円(6.5年)
公立施設	全 体	幼稚園(認定こども園以外)	幼保連携型	幼稚園型
全職種(常勤・非常勤)	332,590円(14.1年)	333,294円(14.2年)	299,101円(12.5年)	—
園長(常勤)	507,478円(32.1年)	511,051円(32.2年)	307,886円(27.0年)	—
教諭(常勤)	370,098円(13.8年)	371,277円(13.8年)	315,897円(10.8年)	—

②保育所

私立施設	全 体	保育所(認定こども園以外)	幼保連携型	保育所型
全職種(常勤・非常勤)	259,385円(9.4年)	262,438円(9.6年)	207,396円(6.0年)	256,863円(7.5年)
施設長(常勤)	532,097円(24.1年)	541,003円(24.9年)	376,301円(10.7年)	580,360円(36.4年)
保育士(常勤)	255,415円(9.9年)	258,441円(10.1年)	203,921円(6.7年)	252,383円(5.8年)
公立施設	全 体	保育所(認定こども園以外)	幼保連携型	保育所型
全職種(常勤・非常勤)	297,989円(13.0年)	298,137円(13.0年)	285,026円(10.5年)	231,680円(13.0年)
施設長(常勤)	545,053円(33.6年)	545,089円(33.6年)	547,685円(34.0年)	485,617円(2.0年)
保育士(常勤)	287,431円(11.8年)	287,494円(11.8年)	286,963円(10.9年)	222,087円(13.1年)

※ ()内は、平均勤続年数。常勤職員の給与には、月額給与のほか、賞与の年額の1/12の額が含まれる。

(参考) 各職種の賃金構造について (資料出所) 平成24年賃金構造基本統計調査

	決まって支給する 現金給与 ①	年間賞与その他 特別給与額 ②	給与月額 ①+(②/12月)	勤続年数
全職種	325.6千円	819.3千円	393.9千円	11.8年
看護師	326.9千円	786.9千円	392.5千円	7.1年
福祉施設介護員	218.4千円	474.4千円	257.9千円	5.5年
ホームヘルパー	208.5千円	282.6千円	232.1千円	5.1年
幼稚園教諭	225.0千円	652.6千円	279.4千円	7.4年
保育士	214.2千円	579.9千円	262.5千円	7.8年

(参考2) 民間施設給与等改善費及び保育士等処遇改善臨時特例事業の概要

①民間施設給与等改善費（保育所運営費）

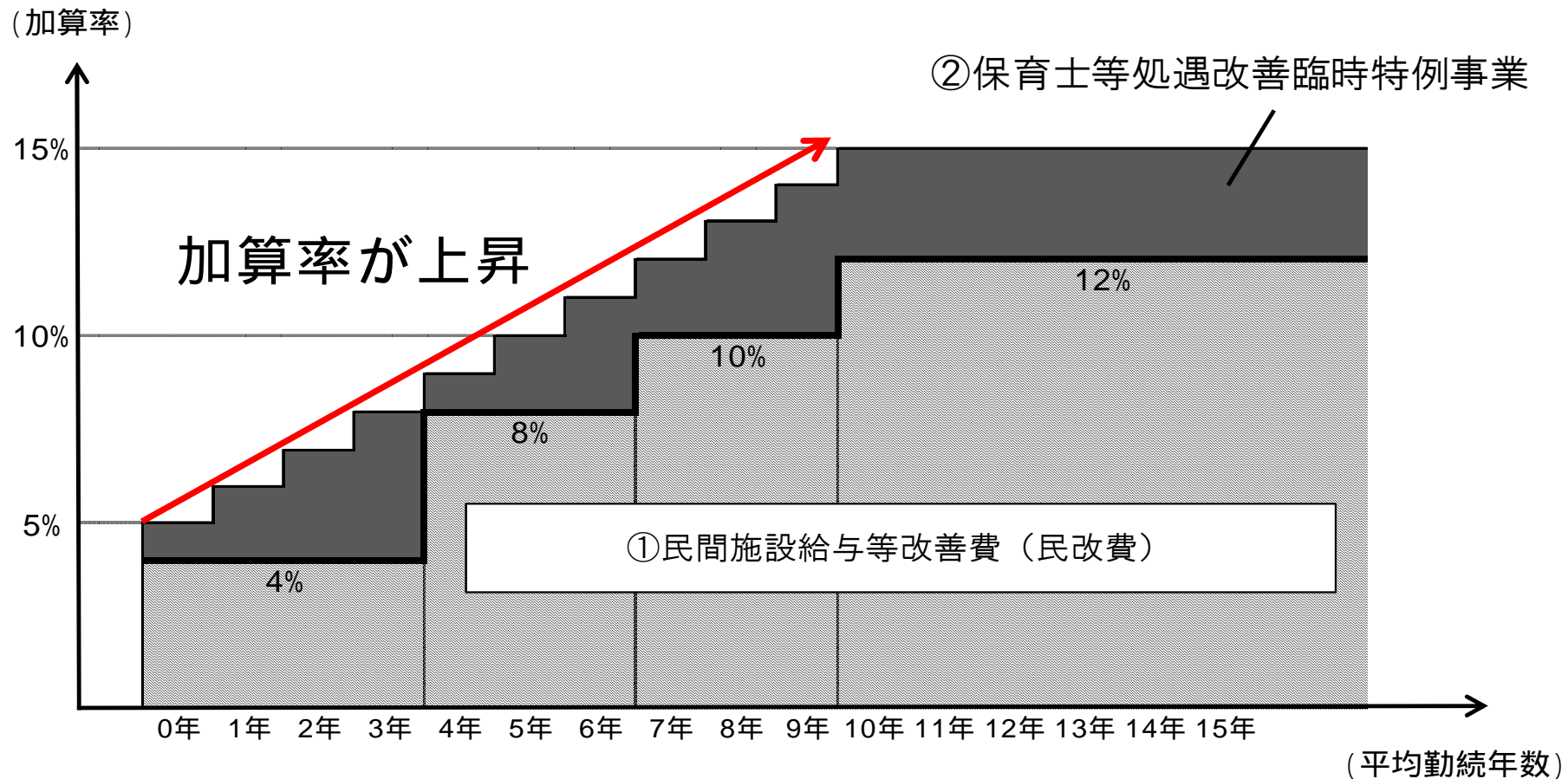
主として公・私施設間における職員の初任給、諸手当等水準の格差是正および 法人における定昇財源の確保という観点から、保育所運営費の加算を行う。

（加算方法）

保育所に勤務する全ての常勤職員の平均勤続年数により、4～12%の4段階の加算率に区分して加算単価を設定。

②保育士等処遇改善臨時特例事業（安心こども基金（平成26年度は保育緊急確保事業））

保育士の処遇改善のため、民間施設給与等改善費（民改費）を基礎に、上乗せ相当額を保育所運営費とは別に「保育士等処遇改善臨時特例事業」として各保育所に対して交付。その際、効果の確認として、保育所に対し、①処遇改善計画の策定、②実績報告を求める。



（参考３）介護職員処遇改善加算の概要

1. 加算の種類

- 介護職員処遇改善加算（Ⅰ）：介護職員処遇改善加算の算定要件のうち、キャリアパス要件及び定量的要件のいずれも満たす場合。
- 介護職員処遇改善加算（Ⅱ）：介護職員処遇改善加算の算定要件のうち、キャリアパス要件又は定量的要件のいずれかを満たす場合。
- 介護職員処遇改善加算（Ⅲ）：介護職員処遇改善加算の算定要件のうち、キャリアパス要件及び定量的要件のいずれも満たしていない場合。

2. 加算の単位数

- 介護職員処遇改善加算（Ⅰ）：介護報酬単位数 × サービス別加算率
- 介護職員処遇改善加算（Ⅱ）：介護報酬単位数 × サービス別加算率 × 0.9
- 介護職員処遇改善加算（Ⅲ）：介護報酬単位数 × サービス別加算率 × 0.8

3. 加算の算定要件

Ⅰ 必須要件（（１）、（２）及び（３）のいずれも満たすこと。）

- （１）賃金改善等に関する計画を作成し、全ての介護職員に周知するとともに、都道府県知事等に届け出た上で、加算の算定額に相当する賃金改善を実施すること。
- （２）事業年度ごとに、介護職員の処遇改善に関する実績を都道府県知事等に報告すること。
- （３）労働に関する法令に違反し、罰金以上の刑に処せられていないこと。また、労働保険料の納付が適切に行われていること。

Ⅱ キャリアパス要件（（１）又は（２）のいずれかを満たすこと。）

- （１）介護職員の任用等の要件（賃金に関するものを含む）を定め、全ての介護職員に周知していること。
- （２）介護職員の資質向上のための計画を策定し、当該計画に係る研修の実施又は研修の機会を確保するとともに、全ての介護職員に周知していること。

Ⅲ 定量的要件

- （１）平成20年10月から加算の届出日の前月までに実施した処遇改善（賃金改善を除く。）の内容及び要した費用を全ての介護職員に周知していること。
- （例）任用等の要件の整備、研修の実施、介護補助器具等の購入、健康診断の実施、職員休憩室の整備 等

2．人件費・事業費（教育・保育の提供）等に係る事項について

保育必要量の取扱いについて

【検討の視点】

- 公定価格の設定に当たり、「保育標準時間利用」及び「保育短時間利用」に係る保育必要量について、必要となる職員体制等を勘案した上で検討する必要がある。
- 両親ともにフルタイム又はそれに近い形で就労する場合を想定している「保育標準時間利用」に対し、現行の保育所の開所時間（１１時間）を利用可能な時間帯としたときに、必要となる職員体制について、現行の保育所運営費、延長保育促進事業による対応等※を踏まえ、どう考えていくか。
 - ※ 現行の保育所運営費においては、保育士の休憩時間を確保する観点や長時間開所に対応するための費用として、配置基準上の人数を超えて１名保育士（常勤保育士）を加配している。
 - ※ 現行の延長保育促進事業は、「基本分」と「加算分」の２事業を対象としている。
「基本分」については、延長保育を実施する保育所において開所時間の始期及び終期それぞれの前後の時間帯において保育需要に対応するために、１１時間の開所時間内に保育士を加配するための費用を補助している。
- また、主にパートタイムなど短時間勤務により就労する場合を想定している「保育短時間利用」に対し、基本となる保育時間である８時間程度を利用可能な時間帯としたときに、必要となる職員体制について、現行の保育所運営費による対応等を踏まえ、どう考えていくか。
- 国会の附帯決議において、「施設・事業者が短時間利用の認定を受けた子どもを受け入れる場合であっても、安定的、継続的に運営していくことが可能となるよう、特段の配慮を行うものとする」とされており、これについて、どう考えていくか。その際、保育短時間利用の子どもの場合にも、保育標準時間利用の子どもと同じ職員体制を確保している場合、どう考えていくか。

年間を通じた学校教育・保育の提供について

【検討の視点】

- 保育認定（２号・３号）の子どもについては、現行の保育所と同様に、原則、土曜日を含めた年間約３００日間の開所を基本として、それ以外の日曜日等の開所については、加算による対応で設定するか。その上で、特段の需要がない場合など、土曜日に閉所するケースの取扱いについて、どう考えるか。
- また、教育標準時間認定（１号）の子どもについては、現行の幼稚園と同様に、１学年３９週（約２２０日程度）の開所を基本としてはどうか。その場合の夏季休業等の長期休業の取扱いについて、どう考えていくか。また、土曜日などの休業日や長期休業期間中に開所する場合の取扱いについて、どう考えていくか。

※利用者負担の取扱いについても、併せて検討していく必要がある。

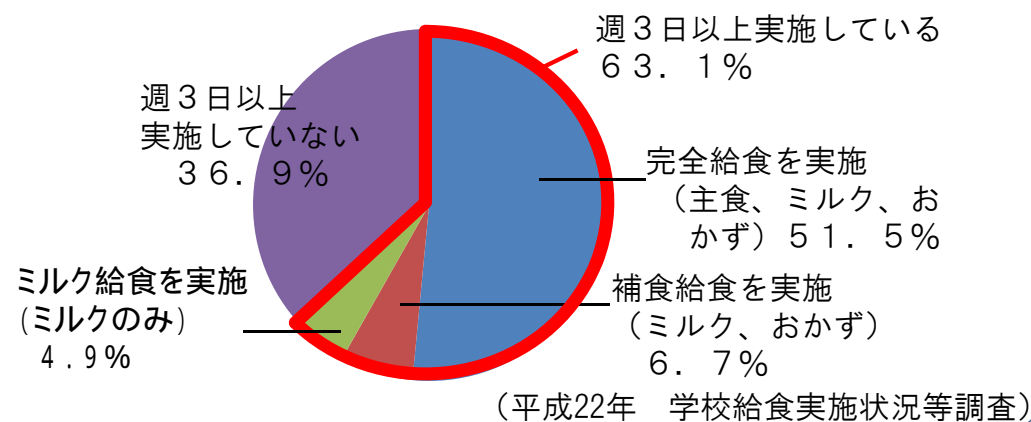
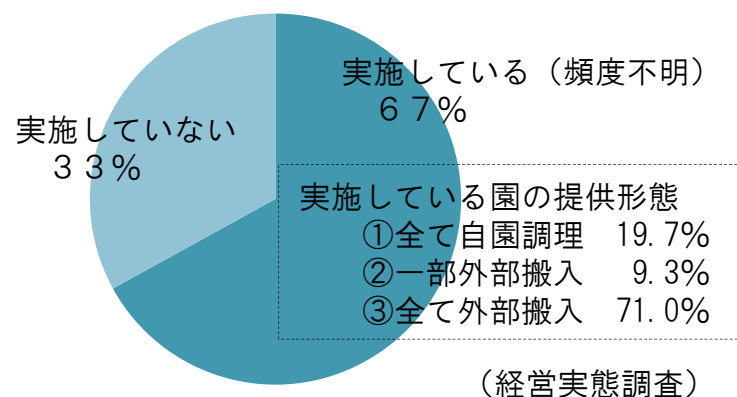
- 通常の開所時間帯と異なる夜間あるいは早朝において開所している保育所については、午前１１時頃から夜１０時頃までを１日の開所時間帯としている場合、現行制度では、夜間保育所加算で対応しており、新制度においても加算による対応で設定するか。

給食費の取扱いについて

【検討の視点】

- 保育認定（２号・３号）の子どもに係る食事の費用について、どのように考えていくか。
- 教育標準時間認定（１号）の子どもに係る食事については、新幼保連携型認定こども園の認可基準に係る議論では園の判断によることとされたが、幼稚園における取り扱いを含め、食事の提供に係る費用について、どのように考えていくか。

（参考：幼稚園の給食実施状況）



障害児の受け入れ促進について

【検討の視点】

- 特定教育・保育施設については、従来の財政支援措置により対応することを基本とするか。

※幼稚園：国の私学助成に基づく特別補助（特別支援教育経費）により、障害児2人以上在園する園に対し財政支援

保育所：重度障害・軽度障害・発達障害の児童2人につき保育士1人の配置等となるよう地方交付税措置

- 今回の法改正で財政措置が新設された地域型保育事業については、障害児の受け入れを促進していくために必要な措置を講じていくこととするか。

（参考）

幼稚園特別支援教育経費の推移

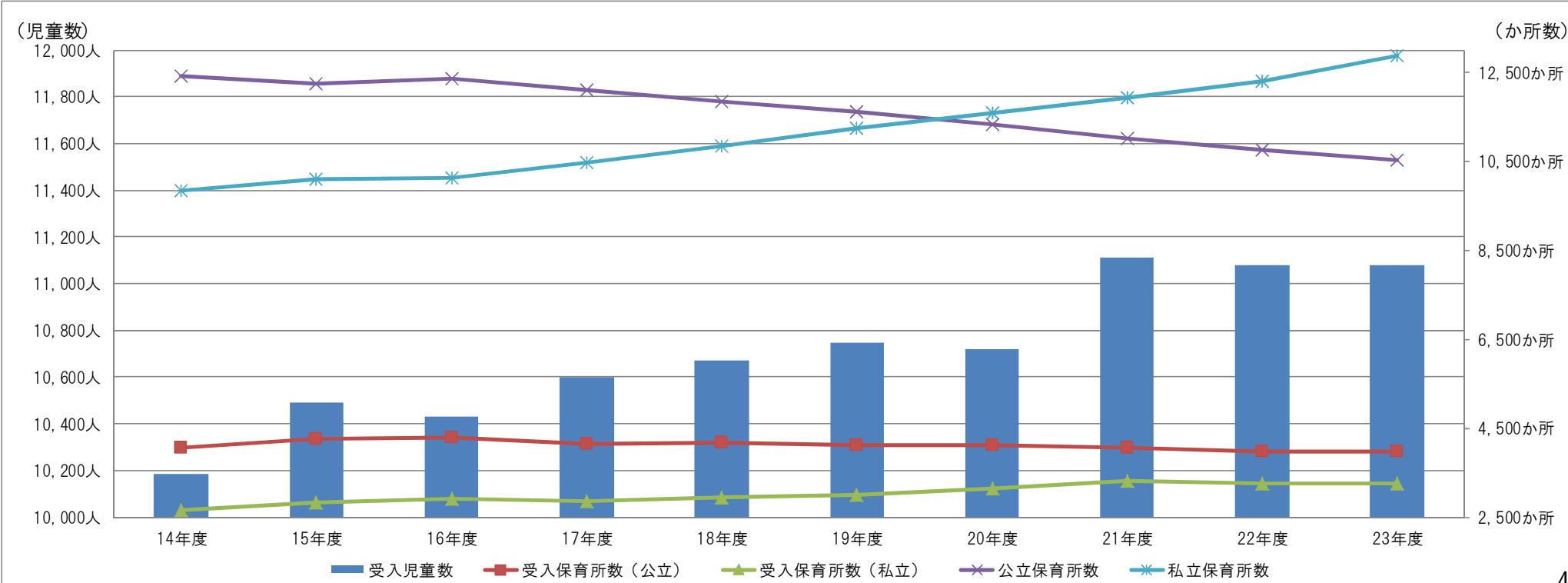
	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度(案)
国庫補助予算(千円)	2,706,000	2,720,000	2,946,000	3,043,000	3,165,000	4,021,000	4,361,000
都道府県補助額(千円)	5,925,446	6,422,751	7,148,564	7,916,640	8,444,224	-	-
補助人数(人)	8,203	8,909	9,857	10,903	11,717	-	-

(参考)

障害児保育の実施状況の推移

	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
保育所数	22,268か所 (100.0%)	22,354か所 (100.0%)	22,490か所 (100.0%)	22,570か所 (100.0%)	22,699か所 (100.0%)	22,848か所 (100.0%)	22,909か所 (100.0%)	22,925か所 (100.0%)	23,069か所 (100.0%)	23,385か所 (100.0%)
公 立	12,426か所 (55.8%)	12,246か所 (60.1%)	12,358か所 (59.7%)	12,090か所 (53.6%)	11,848か所 (52.2%)	11,602か所 (50.8%)	11,327か所 (49.4%)	11,009か所 (48.0%)	10,760か所 (46.6%)	10,515か所 (45.0%)
私 立	9,842か所 (44.2%)	10,108か所 (39.9%)	10,132か所 (40.3%)	10,480か所 (46.4%)	10,851か所 (47.8%)	11,246か所 (49.2%)	11,582か所 (50.6%)	11,916か所 (52.0%)	12,309か所 (53.4%)	12,870か所 (55.0%)

障害児受入保育所数 (特別児童扶養手当支給対象児)	6,722か所 (100.0%)	7,102か所 (100.0%)	7,200か所 (100.0%)	6,995か所 (100.0%)	7,130か所 (100.0%)	7,120か所 (100.0%)	7,260か所 (100.0%)	7,376か所 (100.0%)	7,221か所 (100.0%)	7,145か所 (100.0%)
公 立	4,064か所 (60.5%)	4,265か所 (60.1%)	4,295か所 (59.7%)	4,145か所 (59.3%)	4,175か所 (58.6%)	4,124か所 (57.9%)	4,120か所 (56.7%)	4,066か所 (55.1%)	3,971か所 (55.0%)	3,802か所 (53.2%)
私 立	2,658か所 (39.5%)	2,837か所 (39.9%)	2,905か所 (40.3%)	2,850か所 (40.7%)	2,955か所 (41.4%)	2,996か所 (42.1%)	3,140か所 (43.3%)	3,310か所 (44.9%)	3,250か所 (45.0%)	3,343か所 (46.8%)
受入障害児数 (特別児童扶養手当支給対象児)	10,188人	10,492人	10,428人	10,602人	10,670人	10,749人	10,719人	11,113人	11,080人	10,921人
(軽度障害児を含む実障害児数)	-	-	-	(31,026人)	(33,486人)	(35,157人)	(39,557人)	(41,399人)	(45,369人)	(48,065人)



障害児保育の現状について

ア. 障害児保育にかかる職員の加配(一般財源化)

昭和49年度から平成14年度まで、障害児保育を行う保育所に対し、特別児童扶養手当支給対象児童4人に対し、保育士を1人配置できるよう、補助を行っていた。

平成15年度以降、当該事業が一般財源化され、特別児童扶養手当支給対象児童4人につき保育士1人の配置を地方交付税算定対象とした地方財政措置を行うこととなった。

平成19年度、障害の程度が重い児童以外にも特別な支援が必要な児童が、保育所に多数受け入れられていたことから、地方交付税の算定対象を軽度障害児に広げ、特別な支援が必要な児童2人に対し保育士1人の配置とする要望を行い、地方交付税を拡充した。

<平成14年度> 障害児保育事業(補助金)						<平成15年度> 地方交付税措置						<平成19年度～> 地方交付税措置の拡充					
人件費	程度	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	人件費	程度	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	人件費	程度	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害
	重度	補助金 障害児:保育士 4:1					重度	地方交付税 障害児:保育士 4:1					重度	地方交付税 障害児:保育士 2:1 + 必要な物件費			
	中度						中度						中度				
	軽度						軽度						軽度				
物件費						物件費						物件費					

イ. 職員の資質向上

障害児保育担当者研修会(特別会計)

保育の質の向上のための研修事業の実施(安心こども基金)

ウ. 障害児受け入れに必要な施設の改修等(保育対策等促進事業費:特別会計)

保育環境改善事業(保育所障害児受入促進事業) 補助単価100万円(補助率1/3)

保育所等訪問支援の概要

事業の概要

- ・ 保育所等を現在利用中の障害児、又は今後利用する予定の障害児が、保育所等における集団生活の適応のための専門的な支援を必要とする場合に、訪問支援を実施することにより、保育所等の安定した利用を促進。

対象児童

保育所や、児童が集団生活を営む施設に通う障害児

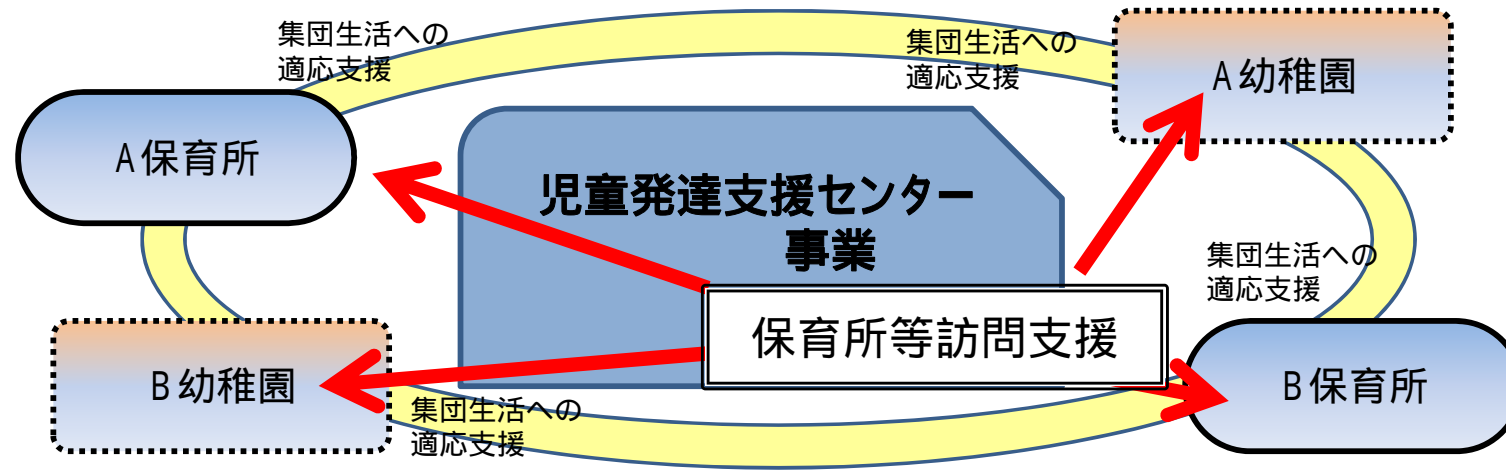
* 「集団生活への適応度」から支援の必要性を判断

* 発達障害児、その他の気になる児童を対象

＝ 個別給付のため障害受容が必要



相談支援事業や、スタッフ支援を行う障害児等療育支援事業等の役割が重要



訪問先の範囲

- ・ 保育所、幼稚園、認定こども園
- ・ 小学校、特別支援学校
- ・ その他児童が集団生活を営む施設として、地方自治体が認めたもの

提供するサービス

障害児が集団生活を営む施設を訪問し、当該施設における障害児以外の児童との集団生活への適応のための専門的な支援等

〔 障害児本人に対する支援(集団生活適応のための訓練等)
訪問先施設のスタッフに対する支援(支援方法等の指導等) 〕

支援は2週に1回程度を目安。障害児の状況、時期によって頻度は変化。

訪問支援員は、障害児施設で障害児に対する指導経験のある児童指導員・保育士(障害の特性に応じ専門的な支援が必要な場合は、専門職)を想定。

その他

- 公定価格上、質の改善のために検討すべき項目として、こういった項目が考えられるか。

検討例①：研修の充実

検討例②：保幼小の連携強化

3．管理費に係る事項について

減価償却費、賃借料の取扱いについて

【検討の視点】

- 公定価格においては、施設基準を考慮して設定する整備費用と施設運営における減価償却費等の全国的な状況を踏まえた上で、賃貸借の形態により設置された施設の賃借料への対応も考慮しつつ、設定する必要があると考えられるが、実際の組み込み方について、どのように考えるか。その際、地域差などについては、どのように考えるか。
- 新幼保連携型認定こども園、保育所については、国会の附帯決議において児童福祉法に基づく新たな交付金による施設整備補助との適切な組み合わせが求められており、どのような形で具体化していくか。

第三者評価の費用の取扱いについて

【検討の視点】

- 現在、保育所について、第三者評価の受審を推進することが求められているほか、確認制度の議論では、全ての施設・事業について、学校関係者（保護者等）評価、第三者評価の受審に努めることとされたが、受審を進めていくために必要な受審料などのコストの取扱いについて、公定価格の中でどう考えていくか。また、受審率の目標について、どのように考えていくか。

．各種加算に関する検討の視点

【検討の視点】

- 政策的な対応として、基本部分とは別に加算措置を設けることについて検討が必要ではないか。
- 現行の保育所運営費における加算の仕組みを参照して検討する際は、画一的な費用として基本部分に組み込むものと、地域特性や経費の性質等を踏まえて加算として実施するものとに分類して検討していく必要があるのではないか。

※ 介護保険制度や障害福祉制度について、制度改革以前の社会福祉施設の措置費制度下では、保育所運営費と同様の加算が設けられていたが、制度改革により包括的な報酬体系とした際に加算の整理が行われている。

⇒以下の表は、現行の保育所運営費の加算について、検討の際の参考となるよう性質ごとに分類したもの。

※ 各加算の（ ）内の数値は、保育所運営費による加算の実施率（保育課調べ（24年度）（私立））

	＜所在する地域により加算＞	＜事業の実施状況等により加算＞	＜その他＞
人件費	<div> <div>・ 寒冷地加算(約12%)</div> <div>冬期又は寒冷地の加算</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主任保育士専任加算(約83%) ・ 入所児童処遇特別加算費(約23%) ・ 保育所事務職員雇上費(約91%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単身赴任手当加算(約0%)
人件費・物件費 (事業費・管理費)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 民間施設給与等改善費(-)＊2 ・ 夜間保育所加算(約1%) 	
物件費 (事業費・管理費)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童用採暖費加算(約20%)＊1 ・ 事務用採暖費(約4%) ・ 除雪費加算(約6%) ・ 降灰除去費加算(約2%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 施設機能強化推進費(約50%) 	

＊1 児童用採暖費加算は、全施設が加算の対象であるため、構成割合は加算額の上乗せのある施設の割合により計上（「その他の地域」以外の施設）

＊2 民間施設給与等改善費は、全施設が加算の対象（保育所運営費の用途制限違反等があった場合に加算が停止されている場合がある。）

- 併せて、定員を恒常的に超過している場合などを含めて、調整のあり方についても検討が必要ではないか。

（参考）幼稚園の私学助成（国）の取扱い

これまでの検討においては、現行の私学助成（国）は、一般補助に加えて特別補助を設けているが、教育標準時間認定を受けた子どもの預かり保育や広く実施される子育て支援活動の補助については、福祉的要素にも鑑みて、地域子ども・子育て支援事業（一時預かり事業・地域子育て支援拠点事業）に位置付けることとされた。また、特に質の高い特色ある取組として先駆的に行われる教育の補助については、幼児期の学校教育の振興の奨励的な見地から、社会福祉法人の設置する幼保連携型認定こども園も対象となっている。

（制度改正検討時点での整理（平成24年3月2日少子化社会対策会議決定）

- 学校教育・保育に係る給付を一体化したこども園給付（仮称）を創設し、学校教育・保育に関する財政措置に関する二重行政の解消及び公平性の確保を図る。
- 現行の私学助成のうち、幼稚園運営の基本部分（一般補助）については、原則として、こども園給付（仮称）に統合する。
- 幼児期の学校教育における多様なニーズに対応する取組（特別補助）のうち、福祉的要素を併せ持ち、広く実施されているもの（預かり保育、子育て支援）については、その内容を見直しつつ、新システムの子ども・子育て支援事業（仮称）（一時預かり、地域子育て支援拠点）に位置付ける。
 - ※ 現在の取組が継続できるよう、子ども・子育て支援事業（仮称）の実施要件等について教育の要素を追加するなど必要な見直しを行うとともに、広域利用の調整の在り方について検討する。その上で、万一広域利用の実態などから市町村事業として実施されない場合には、過渡的な措置として、広域的な見地から都道府県が私学助成の対象とする途を残すことを検討する。
- 一定の基準を満たす施設において行われる、特に質の高い特色ある取組として先駆的に行われるもの（例：特別支援教育、幼児期の学校教育と小学校教育の連携等のうち特に質の高い特色ある取組）については、幼児期の学校教育を振興するための奨励的な見地から私学助成で対応するが、「設置主体を問わず、同じ取組に対しては同じ支援を行う」との考え方に基づき、社会福祉法人立も含め総合こども園（仮称）を対象に追加する。

．その他の論点について

【概要】

- 上記Ⅰ～Ⅲの検討を行いつつ、その上で、以下のような施設・事業ごとの論点について検討・整理していくことが必要。

【主な事項】

1．保育所、幼稚園、認定こども園に係る事項について 施設ごとに求められる職員の配置との関係について

【検討の視点】

- 公定価格の設定に当たっては、法律上、認定区分を勘案して設定することとされており、その際、必要な職員の配置水準を考慮することが必要となる。（P 33 参照）
- 幼稚園・認定こども園については、学校歯科医・学校薬剤師が必置となっており、保育所については必置となっていないが、これをどう考えていくか。
- 新幼保連携型認定こども園については、教育標準時間認定（1号）の子どもと保育認定（2号・3号）といった生活時間帯が異なる子どもが同時に就園することや、児童福祉法に基づく措置の対象施設であること等を踏まえ、園長を補佐する管理職（副園長又は教頭）の配置について、どう考えていくか。

子育て支援機能について

【検討の視点】

- 認定こども園については、子育て支援事業の実施が義務となっていることを踏まえ、給付の本体に組み込む形により公定価格を設定することを基本とするか。その際、どの程度の実施体制・頻度を求めていくこととするか、実態を踏まえながら、検討していくことが必要ではないか。また、類似の性格を有する地域子育て支援拠点事業との関係についても整理することが必要ではないか。
- 幼稚園、保育所については、子育て支援が努力義務とされているが、幼稚園、保育所が認定こども園に対して求める地域子育て支援活動と同様の活動を実施する場合には、公定価格においてどのように対応していくか。
※その際、現行の財政支援措置との関係について整理することが必要
- 幼稚園について、私学助成（子育て支援活動の推進）からの円滑な移行をどう考えていくか。

事務処理体制について

【検討の視点】

- 認定こども園・幼稚園については、直接契約に伴う事務負担（園児募集、保護者ごとに異なる利用料を毎月徴収等）を勘案した事務処理体制について、検討することとするか。
- 保育所については、日常的な管理事務・会計処理等をはじめとする事務を行っていることを踏まえ、現行の保育所運営費における対応を基に、事務処理体制について検討していくこととするか。

2．地域型保育事業（小規模保育、家庭的保育、居宅訪問型保育、事業所内保育）に係る事項について

- 地域型保育事業の認可基準等を踏まえ、例えば以下のような事項について検討、整理する。

【検討の視点】

- 地域型保育事業の認可基準等を踏まえ、例えば、以下の事項について、公定価格の設定において検討していくことが必要ではないか。

検討例①：保育士配置比率の向上に伴う段階的な評価について

- 小規模保育事業A型（保育士10／10）・B型（同1／2以上）において、保育士比率の向上に伴う公定価格の段階的な評価を行うことが必要ではないか（事業所内保育事業も小規模保育事業と同様の基準とした場合、同じ対応が必要）。家庭的保育事業や居宅訪問型保育事業について、保育士が行う場合とそれ以外の者が行う場合の評価をどうするか。

検討例②：連携施設への評価（全事業共通）

- 連携施設との連携において経費のかかる事項（連絡調整）の費用について、給付に組み込む必要があるのではないか。

検討例③：事業所内保育事業における従業員枠との関係について

- 従業員への福利厚生・人材確保としての性格を有し、応諾義務等の対象にならない従業員枠について、地域枠との関係で、給付・利用者負担の水準をどのように考えるか。

検討例④：居宅訪問型保育事業と労働基準法との関係について

- 居宅訪問型保育事業における労働基準法の適用に係る議論と並行して、検討していく必要があるのではないか。

検討例⑤：管理者・事務体制について（全事業共通）

- 事業の管理者、事務処理体制について、特定教育・保育施設における検討と並行して、検討していく必要があるのではないか。

検討例⑥：家庭的保育事業における家庭的保育補助者の配置について

- 保育を受ける子どもが3人以下の場合の家庭的保育補助者の配置への配慮について、調理員との関係も含めて公定価格の議論の中で検討する必要があるのではないか。

(参考Ⅰ) 制度改正検討時点での整理(平成24年3月2日少子化社会対策会議決定)

○ 新たな制度における価格設定方法については、次の考え方を基本とする。

- ・ 質の確保・向上が図られた学校教育・保育を提供するために必要な水準として、人員配置基準や設備環境を基に、人件費、事業費、管理費等に相当する費用を算定する。
- ・ 人件費相当分については、職員の配置基準や施設の開所時間を踏まえた単価設定を行う。この際、子どもの過ごす時間と職員が勤務する時間の違いを踏まえ、認定時間数に対応する価格設定ではなく、必要な職員の配置を考慮した単価設定を行う。
- ・ 子どもの年齢及び人数に対応した給付を基本とするが、施設の規模による経費構造の違いや地域別の人件費等の違いを考慮し、定員規模別、地域別の単価設定を行う。
 - ※ 休日保育、早朝・夜間保育については加算により対応する。
- ・ 施設の減価償却費の一定割合に相当する費用等についても算定する。

○ 学校教育・保育の質に直接関わる職員の常勤・非常勤の別、経験年数等については、公定価格への反映を検討する。

○ 支払い方法

- ・ 満3歳以上児については、標準的な教育時間に対応する区分及び月単位の保育の必要量に関する区分(2区分程度)に応じ、単価区分※(3区分程度)を設ける。その上で、各月初日の在籍児数を基本として、毎月給付する。
- ・ 満3歳未満児については、月単位の保育の必要量に関する区分(2区分程度)に応じ、単価区分※(2区分程度)を設ける。各月初日の在籍児数を基本として、毎月給付する。
 - ※ 具体的な単価については、上記の単価区分に応じ、年齢別、地域別、定員規模別に設定する。また、休日保育、早朝・夜間保育については加算により対応する。

- 職員配置の充実など必要な事項※については、税制抜本改革による財源を基本としつつ、必要に応じそれ以外の財源を含め、国・地方を通じた恒久的な財源を確保しながら実施することとする。

※ 主な内容

- 保育、放課後児童クラブ、地域子育て支援、社会的養護等の量的拡充※子ども・子育てビジョンベース
- 0～2歳児保育の体制強化による待機児童の解消
- 現在の幼稚園の0～2歳児保育への参入の促進
- 小規模保育など新たな保育の類型を創設
- 長時間の保育ニーズへの対応・延長保育の充実等
- 質の高い学校教育・保育の実現（幼保一体化の推進）
- 3歳児を中心とした配置基準の改善
- 病児・病後児保育（看護師等の施設への配置を含む。）、休日保育の充実
- 地域支援や療育支援の充実
- 給付の一体化に伴う所要の措置（施設の事務体制を含む。）等
- 総合的な子育て支援の充実
- 「子育て支援コーディネーター」（仮称）による利用支援の充実等
- 放課後児童クラブの充実
- 社会的養護の充実

- 質の改善に直接つながる職員配置の充実、その他の職員の処遇改善、食育の推進等については、順次、優先順位をつけながら、実現を図る。

- 職員の定着・確保を図るため、キャリアアップの仕組みと併せた処遇の仕組みを検討することが必要。その際、職員のキャリアアップに資する観点から、幅広い業務経験を可能とするための運営の在り方についても検討を進める。

(参考Ⅱ) 子ども・子育て関連3法の国会での附帯決議（主として公定価格に関わる事項）

○ 衆議院 社会保障と税の一体改革に関する特別委員会

- ・ 新たな給付として創設される施設型給付及び地域型保育給付の設定に当たっては、認定こども園における認可外部分並びに認可基準を満たした既存の認可外保育施設の給付について配慮するとともに、小規模保育の普及に努めること。

○ 参議院 社会保障と税の一体改革に関する特別委員会

- ・ 施設型給付等については、幼保間の公平性、整合性の確保を図るとともに、受け入れる子どもの数にかかわらず施設が存続していく上で欠かせない固定経費等への配慮が不可欠であることにも十分留意して、定員規模や地域の状況など、施設の置かれている状況を反映し得る機関補助的な要素を加味したものとし、その制度設計の詳細については関係者も含めた場において丁寧に検討すること。
- ・ 施設型給付及び地域型保育給付の設定に当たっては、認定こども園における認可外部分並びに認可基準を満たした既存の認可外保育施設の給付について配慮するとともに、小規模保育、家庭的保育、居宅訪問型保育及び事業所内保育の普及に努めること。
- ・ 施設型給付、地域型保育給付等の設定に当たっては、三歳児を中心とした職員配置等の見直し、保育士・教員等の待遇改善等、幼稚園・小規模保育の〇から二歳保育への参入促進など、幼児教育・保育の質の改善を十分考慮するとともに、幼稚園や保育所から幼保連携型認定こども園への移行が進むよう、特段の配慮を行うものとする。
- ・ 保育を必要とする子どもに関する施設型給付、地域型保育給付等の保育単価の設定に当たっては、施設・事業者が、短時間利用の認定を受けた子どもを受け入れる場合であっても、安定的、継続的に運営していくことが可能となるよう、特段の配慮を行うものとする。
- ・ 施設型給付、地域型保育給付等の利用者負担は、保護者の所得に応じた応能負担とし、具体的な水準の設定に当たっては、現行の幼稚園と保育所の利用者負担の水準を基に、両者の整合性の確保に十分配慮するものとする。

（参考Ⅲ）現行制度の構造

＜現行の私学助成の算定構造（国→都道府県に対する補助額の算定構造）＞

①一般補助 （幼稚園の経常的経費）	5月1日現在の在籍園児数に応じて算定	在籍園児1人当たり単価（年額）
----------------------	--------------------	-----------------

＋

②特別補助	事業の実施状況等に応じて算定	
i 預かり保育推進事業	預かり保育を実施する園に対する助成を行う場合	1園当たり単価（年額）
ii 子育て支援活動の推進	子育て支援活動を行う園に対する助成を行う場合	1園当たり単価（年額）
iii 特別支援教育経費	障害のある幼児が2人以上いる園に対する助成を行う場合	対象園児1人当たり単価（年額）
iv 教育の質の向上を図る学校支援経費	特色ある教育に取り組む学校に対する助成を行う場合	1園当たり単価（年額）

（注）上記は、都道府県に対する国の補助額の算定構造であり、各都道府県における私学助成は、地域の実情を踏まえた多様な内容・水準で運用されている。（一般補助）

（都道府県による助成額の算出方式）おおむね次のような方式又は組合せにより算出・配分されている。

単価方式	幼児数に補助単価を乗じて算出・配分する方式
標準的運営費方式	公立幼稚園の運営費をモデルに私立幼稚園の「標準運営費」を設定し、その一部（例えば1/2以内）を補助する方式（公立積算方式）
補助対象経費方式	補助対象経費（経常的経費支出額等）に補助割合（例えば1/2以内）を乗じて算出・配分する方式
区割方式	都道府県全体で積算された一定の私学助成予算について、特定の要素（例えば生徒数、教職員数、学級数等）に着目して配分する方式

< 現行の保育所運営費の算定構造 >

①基本分保育単価等	<ul style="list-style-type: none"> 各月初日の入所児童数に応じて算定 ※月途中入退所の際は、日割りにより算定 地域区分、定員区分等以下の区分ごとに単価が異なる。 	入所児童1人当たり単価 (月額)
-----------	---	---------------------

地域区分 (8 区分)	18/100	15/100	12/100	10/100	8/100	6/100	3/100	その他
×								
定員区分 (1 7 区分)	20人まで	21～30人	… (10人刻み)		…		161～170人	171人以上
×								
所長設置 (2 区分)	設 置				未 設 置			
×								
年齢区分 (4 区分)	乳児	1、2歳児		3歳児		4歳以上児		
×								
民改費加算 (4 区分)	12%加算分		10%加算分		8%加算分		4%加算分	

(平成25年度保育単価表(抜粋))

そ の の 保 育 所 所 在 地 域 区 分	そ の の 保 育 所 所 在 地 域 区 分	そ の の 保 育 所 所 在 地 域 区 分	そ の の 保 育 所 所 在 地 域 区 分	そ の の 保 育 所 所 在 地 域 区 分	基 本 分 保 育 単 価 (第1欄)	民 間 施 設 給 与 等 改 善 費 加 算 額 (第2欄)			
						12.0% 加算分	10.0% 加算分	8.0% 加算分	4.0% 加算分
18/100 地 域	20人まで	設 置	乳 児	225,120	円	25,860	21,550	17,240	8,610
			1, 2 歳 児	154,470	円	17,380	14,490	11,590	5,790
			3 歳 児	101,920	円	11,440	9,540	7,630	3,810
			4 歳 以上 児	94,860	円	10,600	8,840	7,070	3,530
		未 設 置	乳 児	199,840	円	22,830	19,020	15,210	7,600
			1, 2 歳 児	129,190	円	14,350	11,960	9,560	4,780
			3 歳 児	76,640	円	8,410	7,010	5,600	2,800
			4 歳 以上 児	69,580	円	7,570	6,310	5,040	2,520
	21人から 30人まで	設 置	乳 児	201,300	円	23,000	19,160	15,330	7,660
			1, 2 歳 児	130,580	円	14,510	12,090	9,670	4,830
			3 歳 児	78,000	円	8,570	7,140	5,710	2,850
			4 歳 以上 児	70,930	円	7,730	6,440	5,150	2,570
		未 設 置	乳 児	184,450	円	20,980	17,480	13,980	6,990
			1, 2 歳 児	113,730	円	12,490	10,410	8,320	4,160
			3 歳 児	61,150	円	6,550	5,460	4,360	2,180
			4 歳 以上 児	54,080	円	5,710	4,760	3,800	1,900

②各種加算	事業の実施状況等に応じて算定	
i 児童用採暖費加算、寒冷地加算、事務用採暖費、除雪費加算、降灰除去費加算	保育所の所在する地域に応じて加算	入所児童1人当たり単価（月額）
ii 単身赴任手当加算、入所児童処遇特別加算費、施設機能強化推進費、保育所事務職員雇上費、主任保育士の専任加算	事業の実施状況等に応じて加算	入所児童1人当たり単価（月額） ※加算の金額について、1園当たりの単価として計算するものもあるが、支払いの際は単価を児童数で除して、児童1人当たり単価としたうえで支払っている。

（注）幼稚園・保育所の収入・支出の構造の違いについて

- 例）・ 現行の保育所運営費は、全国一律に算定される額を基本として支弁される一方、幼稚園に対する経常費の私学助成は、各都道府県の判断により多様な内容・水準で運用されている。
- ・ 保育所運営費は、保育所における保育の実施につき児童福祉法第45条第1項の基準を維持するための費用として設定された公定価格であり、対象経費を示している（用途制限がある）のに対し、私学助成は私立学校としての自主性を尊重しながら私学の振興の観点から行うものであり、助成対象経費が明確に示されているものではなく、用途制限もない。また、保育所運営費には民間施設の給与改善等の仕組みもある。
 - ・ 特に、幼稚園は直接契約・自由価格により運営されており、収支の状況・内容にばらつきがある。
 - ・ 社会保険制度、施設整備費補助等の仕組みや会計処理方法に違いがある。

（参考Ⅳ） 現行の保育所運営費の費用構成

（基本分保育単価の内訳）

区 分		内 容
事 務 費	人 件 費	(1)常勤職員給与（注） ①本俸、特別給与改善費、特殊業務手当 ②諸手当（扶養手当、地域手当、期末勤勉手当、管理職手当、超過勤務手当、住居手当、通勤手当等） ③社会保険料事業主負担金等（健康保険、厚生年金、労働保険等） (2)非常勤職員雇上費 ①嘱託医手当 ②非常勤職員雇上費 ③年休代替要員費
	管 理 費	<職員の数に比例して積算しているもの> 旅費、庁費、職員研修費、被服手当、職員健康管理費、業務省力化等勤務条件改善費 <児童の数に比例して積算しているもの> 保健衛生費 <1施設当たりの費用として積算しているもの> 補修費、特別管理費、苦情解決対策費
事業費		<生活諸費> 一般生活費（給食材料費、保育材料費等）

（注）職員数の考え方

- ・ 所 長 1 人（設置単価の場合）
- ・ 保 育 士 保育士配置基準に基づき算定 ※その他、配置基準とは別に保育士を 1 名加配
- 乳 児 3：1
- 1～2 歳児 6：1
- 3 歳 児 20：1
- 4 歳以上児 30：1
- ・ 調 理 員 2 人（定員 40 人以下の場合は 1 人、定員 151 人以上の場合は 3 人）

1．新制度における利用者負担の構造

- 新制度における利用者負担については、法律上、世帯の所得の状況その他の事情を勘案して定めることとされており、現行の幼稚園、保育所の利用者負担の水準を基に、具体的な水準を検討する。

※参議院 社会保障と税の一体改革に関する特別委員会・附帯決議

- ・ 施設型給付、地域型保育給付等の利用者負担は、保護者の所得に応じた応能負担とし、具体的な水準の設定に当たっては、現行の幼稚園と保育所の利用者負担の水準を基に、両者の整合性の確保に十分配慮するものとする。
- 最終的な利用者負担の額については、国が定める水準を限度として、実施主体である市町村が定める必要があることから、新制度の円滑な施行に向けて、公定価格の議論に合わせて、国として定める水準を検討する必要がある。
- ※ 公定価格と同様、国として定める水準については、最終的に平成27年度予算編成を経て決定するが、新制度を円滑に施行するため、国が定める水準を早期に固め、平成26年度の早い時期には示していく必要がある。

2．利用者負担の検討について

- 利用者負担の検討に当たっては、以下の要素を基に、これまでの議論で整理された内容、国会における附帯決議、幼児教育無償化等との関係を踏まえて検討することが必要。
 - ・ 教育標準時間認定を受ける子どもについては、現行の幼稚園就園奨励費を考慮して、また、保育認定を受ける子どもについては、現行の保育所運営費による保育料設定を考慮して、それぞれ利用者負担を検討。
 - ・ その際、両者の整合性の確保に配慮。
 - ・ また、国庫負担金（都道府県負担金）の精算基準としての位置付けとなることから、私立施設の保育料設定をベースとして検討。

【主な事項】

1．所得階層の区分数 について

【検討の視点】

- 教育標準時間認定を受ける子どもに係る利用者負担の所得階層の区分数は、現行の幼稚園の所得階層の区分数と同様に5区分としてはどうか。
- 保育認定を受ける子どもに係る利用者負担の所得階層の区分数は、現行の保育所の所得階層の区分数と同様に8区分としてはどうか。

そのうえで、満3歳以上の子どもに係る利用者負担については、現行、第6階層以上の大部分が保育単価を基に保育料が決定されており、実質的に第6階層以上の保育料基準額が適用される場合はほとんど存在しないことから、所得階層の区分数を6区分としてはどうか。

2．所得階層区分の決定方法について

- 新制度の利用者負担の所得階層の区分を決定するにあたっては、利用者の手続きに係る負担の軽減や実施主体である市町村の事務簡素化を図るため、教育標準時間認定・保育認定を受ける子どものいずれについても、市町村民税額の所得割額を基に行うこととしてはどうか。

3．利用者負担の切り替え時期について

【検討の視点】

- 「2」において、市町村民税額を基に決定することとした場合、市町村民税の賦課決定の時期が6月となることから、利用者負担の切り替え時期について検討する必要がある。

例1 年度を通じて「前年度分の市町村民税額」により認定

メリット： 年度を通じて同一の利用者負担となるため、国・都道府県・市町村における費用の精算手続きに当たっての事務負担が軽減される。

デメリット： 前年度分の市町村民税額は、前々年の収入を基に決定され、直近の所得の状況が反映されないことから、利用者の理解が得られにくいのではないかな。

例2 4月～5月は「前年度分の市町村民税額」により認定し、6月以降は「当年度分」により認定

メリット： 直近の所得の状況が反映されることから、利用者の理解が得られやすいのではないかな。

デメリット： 年度の途中で切り替えが行われることにより、国・都道府県・市町村における費用の精算手続きが煩雑となる。また、市町村民税の賦課決定後、短期間で認定する必要があるため、市町村、幼稚園等の事務負担が重くなる。→7月又は8月以降での切り替えもあり得るかな。

例3 年度を通じて「当年度分の市町村民税額」により認定（4・5月分は前年度分の市町村民税額により仮認定し、6月以降に当年度分の市町村民税額により4月に遡及して認定）

メリット： 直近の所得の状況が反映されることから、利用者の理解が得られやすいのではないかな。また、年度を通じて同一の利用者負担となるため、国・都道府県・市町村における費用の精算手続きに当たっての事務負担が軽減される。

デメリット： 利用者負担が遡及して適用されることにより、利用者に負担感が生じるのではないかな。市町村、幼稚園等における事務が繁雑となり、遡及に伴う事務負担が重い。

教育標準時間認定を受けた子どもの利用者負担のイメージ

・ 現行の利用者負担の水準を基本。

※（ ）内は、幼稚園就園奨励費の平成26年度予算案の内容を反映させた場合の額

階層区分	推定年収	現行の保育料	
		公立	私立
①生活保護世帯	—	4,900円 (0円)	6,600円 (0円)
②市町村民税 非課税世帯 (市町村民税所得割非課税世帯含む)	～270万円	4,900円	9,100円
③市町村民税 所得割課税額 77,100円以下	～360万円	6,500円	16,100円
④市町村民税 所得割課税額 211,200円以下	～680万円	6,500円	21,300円
⑤市町村民税 所得割課税額 211,201円以上	680万円～	6,500円	25,200円



階層区分	定額利用者負担	
	公立	私立
①		
②		
③		
④		
⑤		

(保育認定を受けた子ども(満3歳以上)の利用者負担との整合性を考慮)
現行の負担水準を基本
の利

※②～⑤：第1階層を除き、前年度分の市町村民税の区分が右の区分に該当する世帯

※現行の保育料：実際の保育料等の平均値から幼稚園就園奨励費補助の単価を差し引いたもの。

※ ①～⑤：現行の階層区分を基本として市町村民税額を基に階層区分を設定。

※ ただし、給付単価を限度とする。

保育認定を受けた子ども（満3歳以上）の利用者負担のイメージ

・ 保育標準時間認定を受けた子どもは現行の利用者負担の水準を基本（ただし、一定階層以上については一律負担）、保育短時間認定を受けた子どもは保育標準時間認定を受けた子どもと教育標準時間認定を受けた子どもの中間程度に設定。

階層区分	推定年収	現行の 費用徴収基準
①生活保護世帯	—	0円
②市町村民 税非課税世帯	～260万円	6,000円
③市町村民 税課税世帯	～330万円	16,500円
④所得税額 40,000円未満	～470万円	27,000円 (保育単価限度)
⑤所得税額 103,000円未満	～640万円	41,500円 (保育単価限度)
⑥所得税額 413,000円未満	～930万円	58,000円 (保育単価限度)
⑦所得税額 734,000円未満	～1130万円	77,000円 (保育単価限度)
⑧所得税額 734,000円以上	1130万円～	101,000円 (保育単価限度)



階層区分	定額利用者負担	
	保育標準時間	保育短時間
①	<div> 現行の保育制度の利用者負担を基本 （ただし、一定階層以上については一律の負担） （教育標準時間認定を受けた子どもとの整合性を考慮） </div>	<div> 保育標準時間認定を受けた子どもと教育標準時間認定を受けた子どもの負担額の中間程度に設定 （教育標準時間認定を受けた子どもとの整合性を考慮） </div>
②		
③		
④		
⑤		
⑥		

②～③：第1階層及び第4～第8階層を除き、前年度分の市町村民税の区分が右の区分に該当する世帯

④～⑧：第1階層を除き、前年分の所得税課税世帯であって、その所得税の区分が右の区分に該当する世帯

※ ①～⑥：現行の階層区分を基本として市町村民税額を基に階層区分を設定。

※ ただし、給付単価を限度とする。

保育認定を受けた子ども（満3歳未満）の利用者負担のイメージ

- ・ 保育標準時間認定を受けた子どもは現行の利用者負担の水準を基本、保育短時間認定を受けた子どもは保育標準時間認定を受けた子どもの一定割合に設定

階層区分	推定年収	現行の 費用徴収基準
①生活保護世帯	—	0円
②市町村民 税非課税世帯	～260万円	9,000円
③市町村民 税課税世帯	～330万円	19,500円
④所得税額 40,000円未満	～470万円	30,000円
⑤所得税額 103,000円未満	～640万円	44,500円
⑥所得税額 413,000円未満	～930万円	61,000円
⑦所得税額 734,000円未満	～1130万円	80,000円 (保育単価限度)
⑧所得税額 734,000円以上	1130万円～	104,000円 (保育単価限度)



階層区分	定額利用者負担	
	保育標準時間	保育短時間
①		
②		
③		
④		
⑤		
⑥		
⑦		
⑧		

現行の保育制度の利用者負担を基本

保育標準時間認定を受けた子どもの負担額の一定割合に設定

②～③：第1階層及び第4～第8階層を除き、前年度分の市町村民税の区分が右の区分に該当する世帯

④～⑧：第1階層を除き、前年分の所得税課税世帯であって、その所得税の区分が右の区分に該当する世帯

※ ①～⑧：現行の階層区分を基本として市町村民税額を基に階層区分を設定。

※ ただし、給付単価を限度とする。

【主な事項（続き）】

4．多子軽減の取扱いについて

【検討の視点】

- 同一世帯の複数の子どもが幼稚園、保育所等を利用する場合、現行制度と同様に多子軽減を導入することとしてはどうか。その際、幼稚園と保育所の「負担の平準化」の観点から、平成26年度予算案において幼稚園就園奨励費の多子軽減措置を拡充させることとしていることから、その内容と整合性をとった形で実施することとしてはどうか。

（多子軽減の具体的な内容）

＜教育標準時間認定の子ども＞

- ・ 小学校3年生以下の年長の子どもから順に2人目以降の子どもが幼稚園、認定こども園等を利用している場合に利用者負担額を軽減。（対象となる期間は、3歳から小学校3年生までの6年間）
- ・ 軽減額は、2人目は半額、3人目以降は無料とし、所得制限は設けない。

＜保育認定の子ども＞

- ・ 就学前の子どものうち、年長の子どもから順に2人目以降の子どもが保育所、認定こども園等を利用している場合に利用者負担額を軽減。（対象となる期間は、0歳から就学前までの6年間）
- ・ 軽減額は、2人目は半額、3人目以降は無料とし、所得制限は設けない。

(参考) 多子世帯の保護者負担の軽減 (幼稚園と保育所との比較)

幼稚園

所得制限: 原則あり (年収約680万円程度まで)

補助対象世帯 年収 ~ 約680万円

補助対象外世帯 年収約680万円 ~

保育所

所得制限: なし
(全世帯が対象)

A世帯

B世帯

C世帯

D世帯

E世帯

小4

小4以上はカウントしない

小3

小2

小1

5歳
(年長)

4歳
(年中)

3歳
(年少)

2歳

1歳

0歳



第1子
[1.0]



第2子 [0.5]
(半額)



第3子 [0.0]
(無償)



第2子 [0.75]
(25%減)
[0.5]



第3子 [0.0]
(無償)



第1子 [1.0]



第2子 [1.0]
[0.5]



第3子 [0.0]
(無償)



第1子



第2子 [1.0]
[0.5]



第3子 [1.0]
[0.0] (無償)

小4

小3

小2

小1



小1以上はカウントしない

5歳

4歳

3歳

2歳

1歳

0歳



第1子
[1.0]



第2子 [0.5]
(半額)



第3子 [0.0]
(無償)

保育所と幼稚園の負担の平準化の観点から、
平成26年度予算案により対応。

[]内の数値は、第1子の保護者負担額を[1.0]とした場合の負担割合。

5 . 実費徴収・上乗せ徴収の取扱いについて

- 実費徴収や上乗せ徴収については、子ども・子育て会議（第10回）子ども・子育て会議基準検討部会（第11回）合同会議における確認制度の議論において以下のとおり整理され、そのあり方については、公定価格の議論において検討することとされたところ。

また、実費徴収については、地域子ども・子育て支援事業の中で「実費徴収に係る補足給付を行う事業」として位置付けられている。

- ・ 施設・事業者は、法に定める利用者負担を受領するものとするとし、その上で、それ以外に実費徴収・実費徴収以外の上乗せ徴収をすることができる旨を定めることを基本とする。
- ・ 実費徴収に限度を設けるかどうか。
実費徴収に係る補足給付を行う事業との整合性が必要。
- ・ 実費徴収、実費以外の上乗せ徴収を行う場合、各施設・事業者においてあらかじめ額や理由を明示することを求める。
公立施設・社会福祉法人立施設による上乗せ徴収の取扱いについても検討が必要。

【検討の視点】

- 検討に当たっては、経営実態調査の調査結果（実費徴収の調査結果は次頁参照。私立幼稚園における学生生徒等納付金の徴収状況等については、詳細を分析して、今後お示しする予定）や、公定価格の中で対象とする経費の範囲と併せて検討していく必要があるのではないかと。

6. その他

(1) 低所得世帯等の減免規定の取り扱い

- 保育所運営費では、所得税非課税世帯に該当する世帯の保育料について、その世帯が、母子世帯等に該当する場合に、減免規定を設けており、新制度の利用者負担においても、教育標準時間認定・保育認定を受ける子どものいずれの場合についても、同様の配慮を求めることとするか。

○基準額上、第2・3階層（所得税非課税世帯）で以下に該当する世帯の場合に軽減措置を取っている。

（対象世帯）

母子世帯等、在宅障害児（者）のいる世帯、その他の世帯（生活保護法に定める要保護者等特に困窮していると市町村の長が認めた世帯）

（軽減額）

上記の世帯に該当する場合は、右欄の基準額表が適用される。

階層区分	定義	3歳未満児	3歳以上児
第2階層	市町村民税非課税世帯	9,000円	6,000円
第3階層	市町村民税課税世帯 (所得税非課税)	19,500円	16,500円



3歳未満児	3歳以上児
0円	0円
18,500円	15,500円

(2) 年少扶養控除等の廃止に伴う算定方法の取り扱い

- 平成22年度税制改正において、年少扶養控除及び16～18歳までの特定扶養控除の上乗せ部分の廃止が行われたが、保育所の保育料の決定に当たっては、扶養控除の廃止に伴う保育料への影響を避けるため、扶養控除見直し前の旧税額を市町村において再計算し、扶養控除見直し前の旧税額を基にして保育料を決定する取り扱いをしている。

※ 幼稚園についても同様に、扶養控除見直し前の旧税額を施設において再計算し、適用することが出来る取り扱いとしている。

- 上記の取り扱いについては、市町村の事務負担が大きいことや、年少扶養控除等の廃止後、一定期間が経過していること、また、今後、その他の税制改正が行われた場合に、旧税額を計算する方法が相当複雑になっていく可能性があること等を踏まえれば、例えば、所得階層の区分に用いる税額を年少扶養控除等の廃止に合わせて変更するなどの方法も考えられるのではないか。